

平成25年度 ゼミ論文

地域コミュニティと繁華街のまちづくり—歌舞伎町ルネッサンスの効果—

文化構想学部4年

学籍番号 1 T100425-4

齊藤 彰

ゼミ論文目次	
序章	P.3
1、研究動機	
2、背景	
3、本論文の目的	
4、論文構成	
第1章、新宿・歌舞伎町の地理	P.5
第2章、新宿・歌舞伎町の歴史	P.7
2-1、新宿の形成	
2-2、歌舞伎町の形成	
第3章、歌舞伎町の盛り場としての変遷	P.13
3-1、盛り場とは	
3-2、歌舞伎町の盛り場としての変遷	
第4章、新宿・歌舞伎町の現在と問題点	P.19
4-1、新宿・歌舞伎町のデータ	
4-2、歌舞伎町のイメージ	
第5章、割れ窓理論とニューヨークのコミュニティ・ポリシング	P.24
第6章、歌舞伎町浄化運動と歌舞伎町ルネッサンスの意義	P.26
6-1、歌舞伎町の浄化運動の歴史	
6-2、歌舞伎町ルネッサンス	
6-3、歌舞伎町ルネッサンスの実態	
第7章、歌舞伎町の地域活性化プロジェクト	P.33
7-1、観光社会学の視点	
7-2、歌舞伎町の地域力向上のために	
7-3、歌舞伎町のイメージ発信	
7-4、歌舞伎町の演劇・映画史	
7-5、歌舞伎町のよそ者を巻き込んだ取り組み	
終章	P.40
1、論文を振り返り	
2、考察	

序章

1、研究動機

新宿歌舞伎町は日本を代表する繁華街である。しかし、その繁華街という華やかなイメージとは裏腹に、このまちは危険なまち・危ないまちといったイメージも持たれてしまっている。確かに歌舞伎町は犯罪率が高い地域であり、しばしば悪い面をマスメディアに取り上げられている。これを見てこのまちに対して近寄りがたいイメージを持つてしまうのも仕方がない。しかし、そういった悪い部分だけではない魅力をこのまちは常に提示してきた。歌舞伎町には多様な娯楽が存在し、それらを求めて集まる人たちがつくり出す独特の空気感があつた。歌舞伎町には常に非日常的な体験があり、ここに集まる人たちには何かしらの共通の意識や感覚があるように感じられる。このまちをつくりてきたのは紛れもなく、このまちに非日常を求めて遊びに来た人たちであろう。そして、このまちに古くから住んでいる人たちもまた、このようなめまぐるしく変わっていく歌舞伎町に集まる人々と関わり合いを持ち、時に敵対し、時に協働しながら歌舞伎町をつくりてきた。

まちや都市、あるいは社会といったものは常に人がつくつてきたものだ。歌舞伎町という繁華街を調査することによって、都市に集まる人々や、その人たちが持つ価値観、そして地域がつくり出す都市の魅力とそこに表出する問題点について知ることができるのではないだろうかと考えた。

2、背景

新宿歌舞伎町は繁華街として様々な変遷を経て急速に発展してきた。この目まぐるしい発展は、この土地が交通の節点として人が集まりやすく、あらゆる種類の人たちを受け入れ、多方面の影響を受けやすかつたというバックグラウンドによるものだ。戦前には新宿は宿場として、戦後には闇市として成長し、1960年代、「若者のメッカ」として多くの注目を集めるようになった。『都市のドラマトウルギー』では、この時代こそ新宿が盛り場であつたとしている。しかし、それと同時にこのまちは危険なものや猥雑なものまでも受け入れてきた。歌舞伎町は危ないまちとしての魅力とその危険性を同時に受け持っていたまちであつた。そして今また歌舞伎町は新たな局面を迎えている。「割れ窓」理論の考え方をもとに1970年代から行われてきた浄化作戦が2000年以降さらに激化し、歌舞伎町は今までよりはるかに安全・安心なまちとなつた。浄化作戦は歌舞伎町にとって新たなスタートであり、今までのマイナスのイメージを払拭し、より健全に人びとを惹きつけるエンターテインメントシティを目指す再生となるものであつた。しかし、それは今までの歌舞伎町の歴史を否定するものでは決してない。官民一体やよそ者などの歌舞伎町を作り上げてきた文化をそのまま受け継ぎながらも、新しい歌舞伎町としてのまちづくりが行われている。

3、本論文の目的

本論文では、日本の副都心である新宿および、その中枢に位置する商業圏、歌舞伎町を

テーマに繁華街における地域コミュニティとまちづくりのあり方について研究する。

歌舞伎町に焦点を当てるにあたって、前提として3つの論点に焦点を当てる。ひとつ目が繁華街という盛り場の特性。ふたつ目が繁華街の安全性。みっつ目が繁華街の観光性である。これらは、それぞれが互いに連関を持ち、それぞれが作用しあって歌舞伎町という繁華街を形成していると考えられる。

4、論文構成

本論文は以下の構成となっている。

第1章では、新宿・歌舞伎町の地理と場所的特徴を示す。

第2章では、歌舞伎町の土台となった新宿の形成と歴史、そして歌舞伎町の形成と発展、まちづくりの始まりについて概観する。

第3章では、繁華街歌舞伎町の発展『都市のドラマトウロジー』で述べられる盛り場という視点で見るとする。

第4章では、今一度、統計データを基に新宿および歌舞伎町の現在の問題点を明らかにする。

第5章では、「割れ窓」理論を用いて、犯罪防止活動とコミュニティ・ポリシングの定義を示す。

第6章では、第5章で述べられた防犯活動の理論をもとに歌舞伎町浄化運動と、「歌舞伎町ルネッサンス」というまちづくり活動を概観する。

第7章では、観光学の視点を用いて、「歌舞伎町ルネッサンス」および歌舞伎町の地域活性化とまちづくりについて考察する。

終章では、本論文の結論を提示する。

第1章、新宿・歌舞伎町の地理

新宿は、東京都の中心に位置する、新宿駅を中心とした歓楽街・オフィス街である。東京を代表する都市であり、東京池袋、渋谷と並ぶ三大副都心のひとつである。

JR東日本、京王電鉄、小田急電鉄、東京メトロ、東京都交通局の5つの鉄道会社が乗り入れる巨大ターミナルで、一日平均乗降者数は約326万人¹（2011年）と世界一の数の人間が往来する駅のひとつだ。中でも繁華街の集客人数は160万人を越える。そのため、駅中及びその周辺は往来する人々のライフスタイルに合わせたサービスを提供する機能を飛躍的に発展させてきた。

新宿駅周辺は日本を代表する繁華街であり、昼夜を問わず人の往来が耐えない一大商業圏である。特に、新宿駅東口付近は老舗と言われるものから新規のものまで、多くのデパート、専門店などが軒を連ねている。一方、駅出口西側は、高層ビル群を特徴とする副都心機能を持ったオフィス街が形成されており、企業活動の中心地としての役割を担っている。歌舞伎町を有する新宿駅北口では、飲食店・ホテルなどのサービス施設が軒を連ねるなど、雑多な一面を持っている。

歌舞伎町は世界を代表する繁華街のひとつであり、様々な娯楽施設が並んでいる。ホストクラブ、キャバクラなどの歌舞伎町の今の歌舞伎町のイメージを形成しているような風俗型の施設や飲食店の他、映画館や演劇場などの歌舞伎町に古くからある娯楽施設の他、ゲームセンターやボーリング場などの最近できたものなど、非常に豊富な種類の娯楽がこのまちにはあり、歌舞伎町は<遊び>に特化したまちであるといえる。しかし、一方で歌舞伎町は世間から危ないまちというマイナスのイメージももたれてしまっているという現状がある。



¹ 『駅別乗降者数総覧'12版(東京大都市圏・京阪神圏・主要地方都市)』



第2章、新宿・歌舞伎町の歴史

年表	
1885年	新宿駅が開通
1923年	関東大震災 ……新宿に一気に人口が集まり、繁華街化する
1945年	敗戦 テキ屋・闇市の発展 ……朝鮮・中国系の商人が増える
1946年	戦災復興都市計画の決定
1948年	戦災復興土地区画整理事業の開始
1947年	歌舞伎町で商店街の形成
1950年	新宿第一復興土地区画整理組合創立 東京都文化産業博覧会開催
1952年	公道での露天営業が禁止 ……闇市時代の終焉
1956年	西武新宿駅開業 東宝コマ劇場設立
1958年	売春禁止法施行
1960年	売春防止法施行
1965年	東京オリンピック用地の区画整理
1973年	靖国通り地下にショッピング街「サブナード」が完成 オイルショック
1977年	淀橋浄水場が閉鎖され、新宿副都心の開発が始まる
1980年	西武新宿駅ビル完成
1982年	新宿駅周辺環境浄化対策会議設置
1984年	風俗営業等取締法施行条例改正
1985年	新風俗営業法施行 東京都町の新宿への移転
1991年	歌舞伎町環境浄化町民総決起大会が開催
1994年	新宿区に東京都庁が移転
2000年	歌舞伎町環境浄化パトロールが開始
2001年	ぼったくり防止条例
2002年	歌舞伎町ビル火災事件 ……新たなまちづくりの契機に
2003年	監視カメラ50台設置 警視庁が組織犯罪対策部を設置
2004年	入国管理局の出張所が設置される 歌舞伎町刷新プランが発表
2005年	迷惑防止条例・ぼったくり禁止条例の改正 繁華街犯罪組織排除協議会総会

2005年	歌舞伎町一丁目東地区街づくり協議会が発足 歌舞伎町ルネッサンス推進協議会発足
2008年	迷惑防止条例の改正 新宿コマ劇場閉館

2-1、新宿の形成

ここではまず歌舞伎町が生まれる土台となった新宿の形成を見て行きたい。新宿の都市形成は戦前と戦後で大きく異なる。ここでは戦前の新宿を4つの時代区分に分けて²歴史を概観していききたい。

1) 江戸期の新宿

新宿という街の起こりは江戸時代まで遡る。それ以前の新宿は広い近郊農村地帯であった。しかし、1603年に江戸幕府が開かれると、今まで存在した政治・経済・文化の中心が近畿地方から関東の江戸へと移ることとなり。その過程で大きな変化をすることとなった。徳川幕府は日本橋を起点に東海道、中山道、甲州街道、奥州街道、日光街道と京都を中心とした道路網を組み入れ、全国の城下町を結ぶネットワークを作り上げようとした。そうした流れのなかで交通が活発化されるとともに発展したのが、幕府や藩御用の人の物流を支えるために作られた宿場であった。当時、宿場は物流の起点として造られていった。

特に、江戸の西の入り口が甲州街道と青梅街道の交通の接点となると、そこには宿屋が集中的に形成された。さらに人々の交流が多くなることで、その地域にはそこに集まる人を受け入れやすいサービス・システムが設置されるようになった。それが茶屋、旅籠、遊郭だ。それらは江戸中期に江戸のまちが四谷区周辺まで拡大していったことと合わせて発展していき、今の新宿にも繋がる風俗の街といったイメージの形成に寄与することとなった(戸沼 2013 pp. 22参照)。

2) 明治期の新宿

明治期になると、廃藩置県の整備の中で新宿は東京府に組み入れられることになる。産業革命が起こり、鉄軌道が新宿駅に結束するようになると、工場や大学などが設置されるようになり、郊外と都心を結ぶ結末点としての機能をより強めていくこととなる。そして、そうした中で駅周辺に巨大な商空間が生まれていった(戸沼 2013 pp. 23 参照)。

3) 大正・昭和前期の新宿

大正。昭和前期には新宿はより西へと拡大していくこととなる。鉄道が伸長していくなかで商空間も発展、三越・伊勢丹などの百貨店が作られたのもこの頃であった。これらは今の東口商店街の原型ともなっている(戸沼 2013 pp. 23~26 参照)。

² 『新宿学』

4) 災害後の新宿

1923年の関東大震災は新宿とその周辺の地域に大きなダメージを与えた。関東大震災以降、人々はより安全な山の手地盤の固い地を住所に求め、中央線沿線の郊外地域に移住する人口が一気に増加した。そして、その後の復興の過程でまちがレンガやコンクリート体質へと変わるなど、新宿周辺の様相は大きく変わっていった。

しかし、第二次大戦での空襲被害が東京にまで及ぶようになると、その被害で焼け野原となった新宿ではまた新たなまちづくりが計画されるようになる。新宿というまちの形成においてこのふたつの災害は大きなターニングポイントであった(戸沼 2013 pp. 26~27 参照)。

2-2、歌舞伎町の形成—近現代

戦後、新宿は焼け野原と化し、新たにまちづくりを再スタートさせなければならなかった。その過程で、新宿には今まで以上に新宿に多種多様な人が集まるようになった新宿に歌舞伎町が作られ、発展していった。ここでは歌舞伎町を軸に歴史をまちづくりの歴史とそこに集まる人の変遷を見て行きたい。

歌舞伎町というまちの発展は以下の5つの段階に分けられる³。

- | | |
|-----------------|--|
| 第一期 (1945~1956) | 復興計画公表から完了まで
小売店の割合が高かった |
| 第二期 (1957~1972) | 高度経済成長期であり、歌舞伎町に若者が集まり始める
飲食店・飲酒店が増える、風俗型娯楽施設ができ始める |
| 第三期 (1973~1984) | 歌舞伎町商圈の拡大
風俗産業の成長し、暴力団の影響が目立つようになる |
| 第四期 (1985~1996) | 新風俗営業法の施行
不法就労や殺人など外国人関連の問題の顕在化 |

第五期 (1997~)

犯罪の多発に対してまちづくりを見なおしていこうという動きが始まる。

2000年に歌舞伎町の治安悪化に対して区、都、国を挙げての急速な一斉の取締を行なわれた。

2001年に雑居ビル火災事件が起こったことで、歌舞伎町の治安再生を目指した浄化運動が活発化した。

³ 『新宿学』

1945年以降の第一期は第二次世界大戦以降の復興期であったと言える。筆者は特にこの期間は江戸時代の交通の接点として宿屋が作られていく過程と並んで新宿というまちの形成に大きく影響を与えた時代であると考えている。

戦後、日本はアメリカ軍占領下となり、ほとんどが焼け野原となった新宿は様相も大きく変化した。そして、人の往来の激しい駅周辺は復員兵・学童などで賑わうようになり、戦後東京としては初の闇市が立ち現れるようになった。この時期の新宿は闇市時代と言われる。当時、闇市を仕切ったのは「三国人」と言われる朝鮮半島・台湾・中国からの出身者や戦時労働者、戦前からのヤクザ、帰還兵、学生などで、このようなバックグラウンドが多様な人々が、戦後の復興を担っていくこととなった。特に関東尾津組によって開かれた新宿駅東口前の闇市が大きな勢力を持つようになった。闇市の多くはその後、新宿の東口と西口で展開していた露天が1950年に公道での営業を理由に禁止されたことを受けて転廃業した。尾津組の闇市は新宿三光町地区という現在の新宿ゴールデン街となる場所へと移転することとなった他、東口の野原組のマーケットは飲み屋街を形成し、東南口の和田組のマーケットは飲食店に変わった。この後に東南口は売春地帯へと変貌していく。(吉見 1987 pp. 267～269, 戸沼 2013 pp. 146～148参照)以上のように闇市時代において、ヤクザのもたらした働きは良くも悪くも大きく、彼らによって歌舞伎町は繁華街として作り上げられていった面もある。

戦後復興には行政はかなり早い段階から取り組み東京の復興計画が策定し、1946年に戦災復興都市計画の決定、1948年に戦災復興土地区画整理事業の開始がされた。結果として、これらの復興事業により駅周辺は再編され、インフラの整備がなされたのだが、しかし実際のところ計画の策定・決定に対して事業の進行にはかなり時間を要したという問題があった。こうしたなかなか進展しない復興の過程に業を煮やし、歌舞伎町というまちのローカルな復興とまちづくり主導したのが鈴木喜兵衛という人物であった。彼は地元住民と一体となってつくり上げるまちづくりの新しいあり方を提示し、地元住民とともに官民一体で歌舞伎町を「道義的繁華街」とするためのまちづくりを行なった。まずは、都市計画に準拠して新宿第一復興土地区画整理組合を創立し、それを前提とした地主、借地人、旧居住者、戦災者などで復興協力会をつくり住民主導での街区の区画整理、道路の造りを計画・実行。1947年には最初の商店街を形成し、その後、街の発展のため劇場、映画館などの芸能施設団地を造りその周辺に商店街、飲食店、住宅などを配置するなど、今の歌舞伎町の町並み及び文化を形作る原型を築き上げていった。特に、喜兵衛がまちづくりを行っている時期に東京都文化産業博覧会が歌舞伎町で開催されたことが歌舞伎町の知名度を上げる大きな一因となり、歌舞伎町周辺は都電の往来が増え、西武新宿駅が開業し、地価の上昇、映画館の増加など、めまぐるしい発展をとげてきた(戸沼 2013 pp. 183～188参照)。今では鈴木喜兵衛は歌舞伎町の官民一体のまちづくりの理想・象徴とされるようになっている。この時代に歌舞伎町は都市にとってなくてはならない盛り場、娯楽施設としての機能を持つようになった。

1957年以降、日本は高度計税成長期を迎える。この時期は歌舞伎町に都内だけでなく都市郊外からも多くの人が集まるようになり、特に「じゅく文化」などと呼ばれ、若者の憧れのまちとして学生や新社会人などが集まり、飲み屋などの盛り場として最も活発な時期であった。また、1960年代には新宿の独自カルチャーが生まれ、メディアからも多くの注目が集まった。「もはや戦後ではない」といった時代背景やヤング思考などが折り重なって、銀座を凌ぐ最有力の繁華街へと成長していった。特に1964年の東京オリンピックを前景気とし、新宿では大型高層ビルやデパートなどの拡張が行われて、近代的なまちなみが出来上がっていった事が大きく、それにともなっていかがわしいものは歌舞伎町へと追いやられていったと見る風潮も存在する。実際、歌舞伎町に飲食店・飲酒店が増えると同時に風俗型娯楽施設ができたのもこの時期であった(吉見 1987 pp. 267~269参照)。

1965年に新宿は淀橋浄水場の移転という大きな変化をむかえた。淀橋浄水場は大正時代末から新宿の発展を阻害しているとして移転が取り沙汰されたが、実際に移転問題が片付いたのは1960年ごろであった。その後、淀橋浄水場は、東村山に移されると、その跡地である新宿駅西口付近では再開発計画が実施された(吉見 1987 pp. 284~287参照)。これを受け西口には超高層オフィス街が建設され、新宿はそれまでの「副都心」から「都心」そのものへと変化した。この後の1970年代の新宿は、都心へと様変わりすることで今まで以上に多くの人間が集まるようになると同時に、多くの人間がひとつの場所に集まることで生じる歪みが表出してきた。そうした過程のなかで、新宿東口ではいわゆる歌舞伎町を含む商圈の拡大が起こる。1973年に靖国通り地下にショッピング街「サブナード」が完成した。1980年ごろからは先端風俗産業が急膨張しはじめる。その他、賭博やポルノビルなどが現れるようになると、歌舞伎町の商業活動において暴力団の影響が顕著に目立つようになった(戸沼 2013 pp. 191~192参照)。歌舞伎町の治安の悪さは、暴力団の拠点であること、そして不法滞在外国人の租界であるといった問題によるところが大きい。当時のマスメディアは歌舞伎町が若者の街として目立つ存在であったこともあって、この歌舞伎町の犯罪事件を大きく報道した。この頃の歌舞伎町は従来の繁華街から道義性を失っていき歓楽街へと変貌してしまった時期であったと言える。

第四期の1985年以降、歌舞伎町では不法就労・殺人事件など大きな犯罪行為などがより顕在化していった。また、それに対する対策がまちとして行われるようになった。1985年、新風俗営業法が施行され先端風俗産業などの取り締まりが行われたが、結局のところこれはたちごっこで、逆に営業形態がよりどぎついものになるなど、あまり効果は得られなかった。歌舞伎町で起こる事件はますます大きくはニュースとして取り上げられるようになり、この頃から、道義的繁華街であった歌舞伎町を取り戻し、歌舞伎町のポジティブなイメージを取り戻そうと歌舞伎町浄化作戦が立てられるようになった。

第五期の 1997 年ごろには歌舞伎町の浄化作戦は今まで以上に活発になっていった。特に歌舞伎町振興組合により、復興計画のコンセプトであり歌舞伎町の原点である「道義的繁華街」を取り戻そうといった取り組みがなされるようになった。2000 年には、歌舞伎町の治安悪化に対して、区、都、国をあげての一斉取り締まり⁴が行われた。加えて 2001 年に雑居ビル火災事件⁵が起り 44 人もの死者が出たことも煽りとなり、このような取り締まりはより強固なものへと変わっていった。

第 3 章、歌舞伎町の盛り場としての変遷

歌舞伎町の形成には以上のような経緯があった。次にこの章では歌舞伎町が形成され、最盛期を迎える中でどのような性質を帯びていったのかを見ていきたい。

⁴ 歌舞伎町浄化作戦

⁵ 歌舞伎町ビル火災

3-1、盛り場とは

まず、歌舞伎町を知るためには盛り場という場所について理解しなければならない。

本論文では盛り場を『都市のドラマトゥルギー』にのっとり上演的パースペクティブで見えていく。

『都市のドラマトゥルギー』において吉見俊哉は、都市とそこに生きる人びととの関係を、<テキスト>と<読者／登場人物>の関係としてよりも、むしろ<上演 performance>と<観客／演者>の関係として把握するように促（吉見 1987 pp. 16）した。これを上演的パースペクティブといった。この上演的パースペクティブにおいて、もっとも重要な観点はふたつ。ひとつは社会的現実というものは、常に上演を通して構成されるということ。つまりは上演の外側や内側といった見方ではなく、常に上演の中でものごとが解釈される。そして、その中で<演者＝観客>のまなざしが保持されるということが重要になってくる。次に、ふたつ目はこのパースペクティブがとりわけ社会の局所における<出来事>に注目していることである（吉見 1987 pp. 21）。ここでは、私たちの社会生活が大小様々な出来事によって構成されているといった考えに基づいて、それらが上演されているといった視点で解釈されることを表している。では、以上のような上演的パースペクティブの中で「盛り場」とはどういった意味を持つのかを考えていきたい。

前述の理屈にのっとりるのならば、もちろん、「盛り場」は、施設の集合や特定の機能をもった地域としてある以前にまず<出来事>としてある（吉見 1987 pp. 24）と考えられる。ということは、つまり都市構造や産業構造だけではない、そこに集まった人びとの生き方、社会関係、固有の集合的な気分などを見ていく必要があるはずだ。そしてこの考え方にのっとりれば、「盛り場」に集まった人びとは、その場固有の秩序化原理（社会的原理）を持っており、それに基づいて人びとは<出来事>を上演していると考えられる。では、どのようにして、その「盛り場」特有の社会的コードを探ることができるのだろうか。それは、そこに集まった人びとを研究することで可能になる。

3-2、歌舞伎町の盛り場としての変遷

次に、3-1で述べた上演的パースペクティブを持って新宿・歌舞伎町を考察する。

関東大震災以前、日本の都市における盛り場は浅草であった。しかし震災以降は、盛り場としての機能は銀座に移り、また、1960年代以降には新宿へと移っていた⁶。その過程の中で盛り場はその都市構造の中での位置や、担い手の世代的・階層的広がり大きく変わっていき、それぞれの場が盛り場としてのその都市らしさを代表し上演していくという経緯があった。新宿における盛り場としての（新宿らしさ）とはどのように変遷していった

⁶ 『都市のドラマトゥルギー』

のであろうか。

・歌舞伎町の盛り場としての特徴

前章で述べたように、新宿は戦前から交通の接点として機能してきた。ターミナル的な特徴によって、新宿には東京西近郊から主婦、学生、サラリーマンなどが集まり、それと共に集まってくる人びとに対応した様々な商業施設・娯楽施設が建設され、新興の繁華街として成長してきた経緯がある。だがここで注目したいのは、こうしたターミナルとしての新宿とは若干異なる、新宿というまちの盛り場としてのもうひとつの姿があるということだ。それはすなわち、新宿がおそらく次の二点で、たんなるターミナルとは言葉には還元されない性格を持っており、それらが一九六〇年代にこの地が若者文化のメッカとなっていく際の基板をかたちづくっていった（吉見 1987 pp. 266）という面である。

このふたつの点とは、新宿の宿場としての特徴と闇市としての特徴の2点だ。以下、このふたつの特徴についてまとめていきたい。

まずひとつが、新宿が宿場街として発展してきた経緯があるという点だ。新宿は江戸時代を通じて宿屋のまちとして発展してきた。その過程の中でこのまちの中で遊郭の存在もまた大きくなっていった。こうした新宿の「売笑市街」としての機能は今の歌舞伎町界わいに受け継がれて、まちの猥雑なイメージとして継承されている。このような当時の風潮に対して異を唱えたのが鈴木喜兵衛であった。鈴木は戦後まもなく角筈一丁目北町の一角（後の歌舞伎町）を「道義的繁華街」とするまちづくりを提案し、主導した。鈴木が考える「道義的繁華街」とは「物を売るにもお客様のきもちになって商売する、私は之れを道義商道と思ひ此の道義商道に基づく繁華街を皆様とともに建設致し度いのであります」⁷という言葉に表れているように、つまりは簡潔に言ってしまうと戦後新東京の家族連れが楽しめる文化的アミューズメントセンターであった。しかし、こうした鈴木が理想とは違い、実際の歌舞伎町はやはり売春のまちとしての性格を強めていく。特に1958年に新宿で売春防止法が施行されると、新宿の性風俗は三光町や二丁目などから歌舞伎町へと集中するようになり、より産業化していくこととなった（吉見 1987 pp. 266参照）。

次にふたつ目が、新宿には東京ではじめて闇市が開かれ、都内最大規模で発展してきたまちであるという点だ。この闇市を率いていたのは尾津組などのいわゆるヤクザや三国人などの外国人などのはぐれ者であった。こうした戦中の混乱に乗じた政府非公認な活動が新宿というまちを育て、また、新宿のアナーキーな危ないイメージとも結びついてきた。しかし、これも1946年には行政の強い取り締まりを受け、より政府によって組織的に管理されるようになる。それとともに、露天商間での抗争が激化し、警察による闇市追放運動もあいまって、段々と闇市とそれを傘にする勢力はその力を弱めていくこととなった（吉見 1987 pp. 267～269 参照）。

以上の2つの点が、歌舞伎町を他の盛り場とは違う歌舞伎町らしいまちとして特徴づけ

⁷ 復興協力会第一次総会での鈴木喜兵衛氏の挨拶

るポイントである。これらの特徴は歌舞伎町により雑多なまちとしての魅力を与え、それと同時に様々な要素を呼び込む求心力となっていた。性風俗、ヤクザ、他にも政治、芸能、あらゆる先鋭的なものを取り込んでこのまちは大きくなっていった。それと同時に、先鋭的なものを雑多に取り込んでいく危険は常に存在していたと考えられる。それは時には事件として表出していくこととなる。歌舞伎町の雑多で先鋭的な魅力というものは常にそれをコントロールしようとする側の人間との管理や取り締まりとの関わりの中で存在する。こうした歌舞伎町文化は、次第に商店街や警察が結びつきを強めていくなかでも、確かなものとして受け継がれていった。

新宿の2つの特徴

- ・宿屋から売春の街へ
- ・闇市が発展し、それに相対してヤクザの取り締まりが行われた。対立の街

・アングラ文化の拠点としての新宿

売春のまち、ヤクザのまちとしての特徴を持ちながら新宿は様々な先鋭なものを吸収していき、1960年代には日本のアングラ文化の拠点となった。左翼の学生や演劇青年、音楽家、フーテンなどそこに集まる人間は実に様々で、それゆえにデモや集会などを通じて特異な言論が生まれ、大きなエネルギーとなっていた。当時、赤瀬川原平⁸氏はこの街に「青ざめた野次馬軍団」の巨大な集塊がたむろし、混在し、互いに交錯し合いながらそのエネルギーを無秩序に乱反射させていく不確定の空間をかたちづくっていたことを示している（吉見 1987 pp. 272）といったことを言っている。当時の新宿にあったのは混在と無秩序の不確定性であった。

このような状況は1967年頃からマスコミに注目されるようになり、「新宿・巨大なアミーバ」「新宿・アングラ全盛の町」などと面白おかしく取り上げられ、衆知のものとなっていた。しかし、このような新宿文化の広まり方は、必ずしも肯定的な面だけとは言えず、違和感が残るものであった。たとえば矢崎泰久⁹氏は、「マスコミに騒がれるようになってから、新宿は急速につまらなくなった」と言う。「新宿の良さは無名の魂に宿った混沌とした足どりであり、気安さは無名であることの連帯感」であったのに、それが急速に失われてしまったのだ（吉見 1987 pp. 273-274）。だが、重要なのは、少なくとも60年代末までの新宿は、たとえマスコミがこの街を先端的風俗の街として演出し、馴化していかうとしても、それをなし崩しにしてしまうだけのエネルギーを抱え込んでいたことである（吉見 1987 pp. 274）。こうした傾向は、例えば1969年の新宿西口中央公園事件¹⁰などに

⁸赤瀬川原平：前衛美術家、作家

⁹矢崎泰久：ジャーナリスト

¹⁰ 都と商店街による浄化運動によって花園神社を追われた演劇の一派が、新宿西口中央公園で無許可で公演を強行した事件。

もよくあらわれている。この事件では新宿のアングラ文化は、それに対する都と商店街による新宿浄化運動を受けながらも、それすらも巻き込んで乱痴気騒ぎとし、新宿文化の一部にしてしまった経緯がある。これは60年代という市民社会の空気と新宿の盛り場としての特性が合わさってできた当時の新宿らしさの表れであったと言えるだろう。

・〈新宿的なるもの〉の上演

以上のような新宿の様相を『都市のドラマトゥルギー』では〈新宿的なるもの〉と名づけた。1960年代まで新宿を舞台に繰り広げられてきた〈新宿的なるもの〉の上演には4つの特徴があげられる。まず第一は、この街がありとあらゆる種類のヒトやモノを無差別に受け入れ、それでいておのれの独自性を失わない強烈な消化能力を持っていたこと（吉見 1987 pp. 276）。つまりは、この街がよそから来た流れ者の街として発展してきたこと。第二の特徴は、その先取り性である。新宿という街に現れるものは決して過去の繰り返しではなく、全て新鮮で未完成なものばかりであった。それゆえに、次から次へとめまぐるしいスピードで変化していき、なにかが根付くということはない。新宿は当時の時代の現在を映す鏡のような場所であったという。第三の特徴は、この街が変幻自在な特徴をもち、次に何が起こるかわからない不確定性を孕んでいたことだ（吉見 1987 pp. 277）。当時の新宿は常にどこかに思いがけない発見があるような街であり、様々な要素が混在する危険の中に、それを発見する好奇心をくすぐられるような街であった。新宿の変幻自在性と不確定性はまず間違いなく様々なヒトやモノが集まることで生まれ、そしてまたそれが人を魅了していくといったサイクルが存在した。新宿の良さは、「無名性の魂に宿った混沌とした足どり」にあるというが、そうした無名性は、人々がこの街に来ることで日常の自明化された同一性を失い、いつでも別の何者かに変身できる状態にいたことを示しているのだ（吉見 1987 pp. 278）。つまりは、新宿には様々なヒトが集まる都市特有のアイデンティティの喪失体験があり、それはまた新宿という街が人を魅了する力となっていた。

そして、第四の特徴がこの地で演じられていく諸々の出来事が、参与する人々の相互の濃密なコミュニケーションを媒介に、一種の共同性の交感とでも呼ぶべきものを生み、それが出来事の成り行きを大きく変化させていく契機となっていたことにある（吉見 1987 pp. 278）。新宿という街は様々な雑多なものを吸収しながらも、そこにあったのは当時集まった人々の同時代性であり共通意識であった。そうした共通意識の交感があったからこそ、人は新宿という盛り場に集まり、会話を交わし合い、集会やデモなどの運動が活発に行われていった。

〈新宿的なるもの〉の特徴

- 1、強烈な消化能力
- 2、先取的性格
- 3、変幻自在さ

4、共同性の交感

以上のような特徴は多くの盛り場とも共通点を持っている。しかし、<新宿的なもの>とは例えば浅草のような歴史的背景を持っていないといった特色がある。新宿は決して浅草の再現ではなかったし、常に新しいものとして受け止められてきた。そして、その新しさを築き上げていったのはまぎれもなく、そこに集まる人々であった。

・「新宿に群れ集う人々

1960年代、「新宿は若者のメッカ」などと呼ばれていたことからわかるように、新宿における主要な登場人物は若者であった。高度成長の中で就職や大学進学などで新宿には地方から若者が上京してきた。彼らは新宿から見れば、外からの流入者であったが、この街の「流れ者相手の宿場」といった性質がそれを柔軟に受け入れていった。

しかし、1965年の淀橋浄水場の移転が行われ、新宿西口の再開発が始まると新宿は「副都心」から「都心」へと変わってしまうと、今までの新宿にあった治安の悪い流れ者の街といったイメージを払拭しようという動きが出てきた。フーテンや浮浪者、売春婦にとっての居場所であった新宿はそうした人を寄せ付けない雰囲気次第に纏うようになる。特にその後の1973年にサブナードが完成した頃を境に、次々と三井住友などの大木々用のビルが立つようになり、一方で、飲み屋やスナックなどがどんどん淘汰されていった。そして、若者は新たな行き場を求め新宿二丁目やゴールデン街などの歌舞伎町へと集まっていくこととなる。つまり新宿は1973年あたりを分水嶺として、地方から上京して間もない若者たちが気軽にたむろしていけるような「流れ者相手の宿場」としての性格を失っていく。そしてそれとともに、この街にこれまで溢れていた「若く充たされないエネルギー」は、「馴地されたエネルギー」のなだらかな流れへと徐々に変質していくのである（扇田 1979 pp44-47、吉見 1987 pp. 287）。

・新宿のアジールの特徴

「新宿」とは、出来事がそこに集う人びとに共有される幻想の共同性に基づいて紡ぎだされてくるような盛り場であった（吉見 1987 pp. 310）と言うことは可能であるが、さらに深く新宿を知ろうとするならば、そこに集まった人々がどういう人々であり、新宿という盛り場にどのような目を向けていて、どのように組織されていたのかを知る必要がある。そうしたことをかんば見て、第一に指摘できるのは、「わたしには、人々がこの町に脱出を求めにくるのだというふうにして思えてしょうがない。つまり、ここへくれば、自由の国への旅券が手に入ると暗黙のうちに認め合っているのだ」という関根弘¹¹の言葉が端的に示しているように、六〇年代の若者たちは、「新宿」へ行くということが、まず何よりも退屈な日常からの<脱出>として感受されていたと思われることである（吉見 1987 pp. 311）。

¹¹ 関根弘：詩人

新宿がこうした避難所（アジール）的性格を持つようになったのは、新宿がターミナルとして発展してきた経緯とともに、その発展に取り残されていった周縁部の飲み屋街や風俗街の存在が不可欠であった。だが、六〇年代に新宿に集まった若者たちにとって、「新宿」がたんに「避難所」としてあったわけではない。誰もが「共犯者の心理に落ち込む」ことのできる「新宿」とは、地方から単身で上京してきた若者たちにとって、彼らが後にしてきた現実の家郷とは別の、もうひとつの幻想の〈家郷〉を仲間と共感することのできる空間であった（吉見 1987 pp. 312）。しかし、これは決して過去や伝統へのノスタルジーで作上げられたものではなく、むしろ未来に創造されるべきものとして全く新しく受け入れられたということが重要だ。歌舞伎町に集まる若者はその共同性の交感に存在しないような懐かしさを、新しい形で受け取っていたのではないだろうか。

新宿・歌舞伎町は宿屋や闇市を背景に猥雑で危険な街や若者の避難所（アジール）として求心力を高めていった。そこは地方を離れてやってきた若者や学生や労働者、フーテンやよそ者たちの理想郷であり、常に何か新しい発見がとして非現実的なく出来事〉を交感し共有できる唯一の場所であった。

しかし、その一方でまた、この街は警察との抗争も含めて歌舞伎町文化として成立してきた経緯があった。盛り場・歌舞伎町文化は人が集まれば集まるほどに警察と治安維持と密接に関わってきた。しかし、近年では規制が強まるとともに、歌舞伎町の魅力は失われてしまっているのではないかといった見方もある。確かに治安を守る活動は当時の新宿・歌舞伎町に必要なものであった。しかし、それはどのような形で行われるべきであったか。今、新しい歌舞伎町の魅力を作るとしたら、どうすべきなのだろうか？

第4章、新宿・歌舞伎町の現在と問題点

2、3章では歌舞伎町の歴史とその特徴を述べてきた。歌舞伎町というまちは元来人が集まりやすい地域性を持っていた。それも様々なタイプの人間が無い混ぜになって集まり、歌舞伎町を形作ってきた。ここで、今一度新宿・歌舞伎町に住む人やそこに集まる人達が

どのような人たちなのか見るとともに、歌舞伎町に存在する問題点を考えていきたい。

4-1、新宿・歌舞伎町のデータ

・新宿の特徴

まず、新宿区の大きな特徴としてあげられるのが、昼間人口の多さである。

新宿区の人口データを見てみると、人口の男女合計が 323,268 人とある。この数字は都内 23 区の人口の中では 12 位にあたる。人口密度で言えば新宿区は 7 番目の位置だ。意外と思われるかもしれないが、新宿は世界最大規模の駅の利用者数を持ちながらそこに住んでいる人間はそれほど多くない。それは、新宿駅周辺が西側はオフィス街として機能し、東側は繁華街として機能しているからで、新宿は住む場所ではなく郊外から仕事や買い物などの目的でやってくる人が多い場所だからだ。そのため、新宿に住んでいる人ほどそこまで多くはないものの、新宿に何かしらの用事でやってくる人たちの昼間人口は 75 万人にのぼり、これは 23 区内 4 位にあたる。

そして、新宿の特徴の次にあげられるのが、労働・生産人口の高さだ。まず、新宿の人口を年齢別で見ると、新宿区は生産年齢の 15 歳～64 歳の人口が高いとわかる。新宿の労働力率は区内でもトップである。23～34 歳の若者世代が 3 割を占め、23 区で 2 番目に高い数字となっている。それに加えて、昼間には周辺・郊外から仕事のためにやってくる人も多い。新宿は日本最大規模の産業都市と言えるだろう。

また、近年も人口が増加中であり、外国人率が高くなっていることも特徴だといえるだろう (2013 新宿区新宿自治創造研究所 pp.6~7,18~22,26 参照)。

・歌舞伎町の特徴

歌舞伎町地域の特徴を見てみると、まず高齢者率が非常に低い(16.7%)こと、15 歳以上の労働力人口が新宿区内 1 となっている(74.2%)ことが特色としてあげられる。特に産業としては「卸売業・小売業」のほか「不動産業・物品賃貸業」「宿泊業・飲食サービス業」の割合が高い。(2013 新宿区新宿自治創造研究所 pp.28~30、50 参照)

表 1、統計データ http://www.city.shinjuku.lg.jp/kusei/index02_101.html より (H25、10 月調べ)

・男女別人口

		男	女	合計
住民基本台帳人口		161,371	161,897	323,268
内訳	日本人	144,866	144,957	289,823
	外国人	16,505	16,940	33,445

・年齢 3 区分別人口

		年少人口 (15歳未満)	生産年齢人口 (15歳～64歳)	老年人口 (65歳以上)
住民基本台帳人口		27,564 (8.5%)	232,090 (71.8%)	63,614 (19.7%)
内訳	日本人	25,104 (8.7%)	201,944 (69.7%)	62,775 (21.7%)
	外国人	2,460 (7.4%)	30,146 (90.1%)	839 (2.5%)

※構成比の計については、小数点第二位で四捨五入をしているため 100%にならない場合があります。

・犯罪率

また、一年間の新宿の刑法犯発生件数は 6230 件（H 2 5 年 9 月末調べ）と区内でも 2 位の件数となり、新宿の治安の悪さと暮らしぶらさというものがわかる。

（東京都の区市別刑法犯発生 <http://www.keishicho.metro.tokyo.jp/toukei/keiho/keiho.htm>）

では、こうしたデータからわかる新宿・歌舞伎町の問題点とはなんだろうか。駅周辺に位置する歌舞伎町は新宿の中でもっとも人の往来が激しい。本来そこに住む人々に加え、仕事のためそこに集まってくる人も多いため。その中にはもちろん多くの外国人労働者が含まれている。そのためコミュニケーションの齟齬や治安の悪化、様々なルール違反などの行為が散見される。あるいは、それが犯罪として表出しやすいまちとなっているのではないか。

4-2、歌舞伎町へのイメージ

では、歌舞伎町というまちを身近に感じることができる新宿区民は歌舞伎町にどのようなイメージを持っているのだろうか。平成 23 年度の第二回新宿区政モニターアンケートでは、新宿に住む人々の歌舞伎町に行く頻度は男女合わせて、頻繁であると言えるほぼ毎日から週 1～2 程度がおよそ 1 割、一方で年に数回程度が 3 割となっている。新宿を代表する繁華街である歌舞伎町は、想像以上に新宿に住む人々からは利用されていないことがわかる。表 2、歌舞伎町に行く頻度(性別)

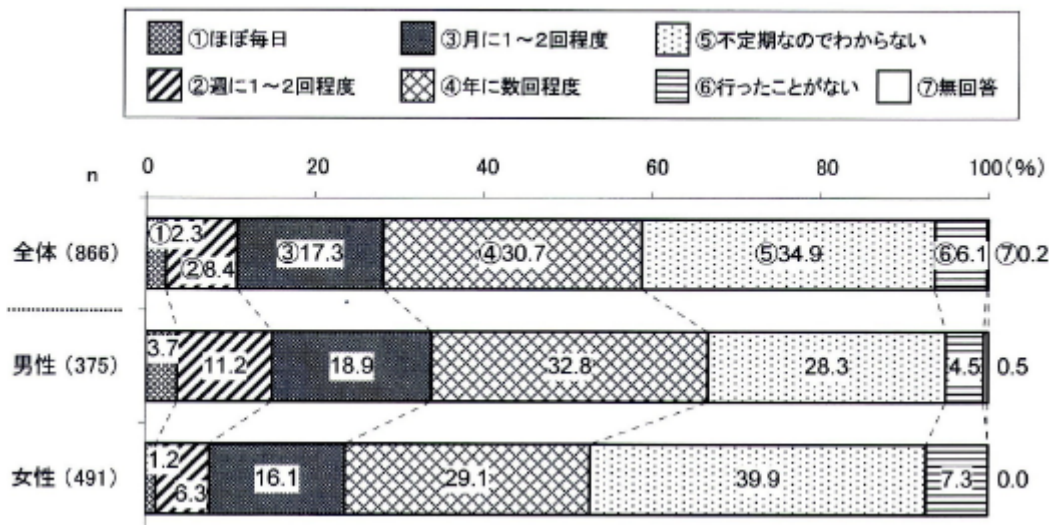
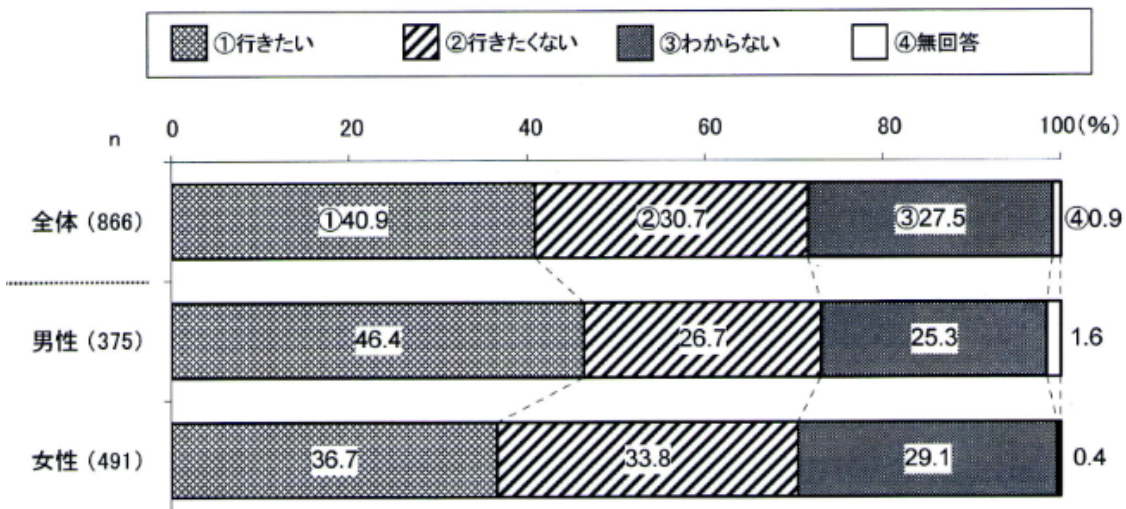


表 3、今後の歌舞伎町への来街意向(性別)



しかし、表 3 を見てみると、歌舞伎町に行きたいと考えている区民はおよそ 4 割にあたり。ここには、実際に頻繁に歌舞伎町を訪れている人たちの割合とのギャップがあり、ここから歌舞伎町は訪れたい街ではあるのに、なかなか訪れる機会が持てない、あるいは行きづらい街となってしまっているのではないか、という仮説が立つ。

表 4 を見てもらえば分かるように、歌舞伎町への来街意向は平成 17~19 年の間に上昇し続け、その後は横ばいとなっている。では、この平成 17~19 年の間には一体何が起きて、歌舞伎町への来街意欲が高まったのであろうか。平成 17 年、2005 年の歌舞伎町はちょうど歌舞伎町ルネッサンスの活動が軌道に乗り始めた時期であった。治安の悪化が取り除かれ、歌舞伎町の明るく健全なイメージと、娯楽のまちとしての楽しさがより活発に発信されるようになった時期である。これは、実際に歌舞伎町のイメージアップに大きく貢献していることが表 3 から分かるだろう。歌舞伎町ルネッサンスは平成 17~19 年の間に歌舞伎

町のイメージを大きく変えてしまった一大事業であった。

事実、歌舞伎町へ行きたい理由をアンケートした結果、歌舞伎町のももとの娯楽であった映画などの楽しめる施設の存在の他に、歌舞伎町の変化を見たい、安全なまちになったと思うから、新たな興味を引き出してくれそうだから、などの歌舞伎町の新しい取り組みに好意的な意見が多く見られる。歌舞伎町は常に変わっていくまちであったと思うが、それはまさに今、これまで以上に大きな変革を迎えているのではないだろうか。それを見て、歌舞伎町を身近に感じることができる新宿区民の人たちは、歌舞伎町にあった悪い印象を捨て、新たな魅力を持った歌舞伎町を訪れたいと考えるようになった。この変化の要因はやはり浄化運動と歌舞伎町ルネッサンスの活動にあるだろう。

表 4、今後の、歌舞伎町への来街意向

(平成 17 年度～平成 22 年度区政モニターアンケートとの比較)

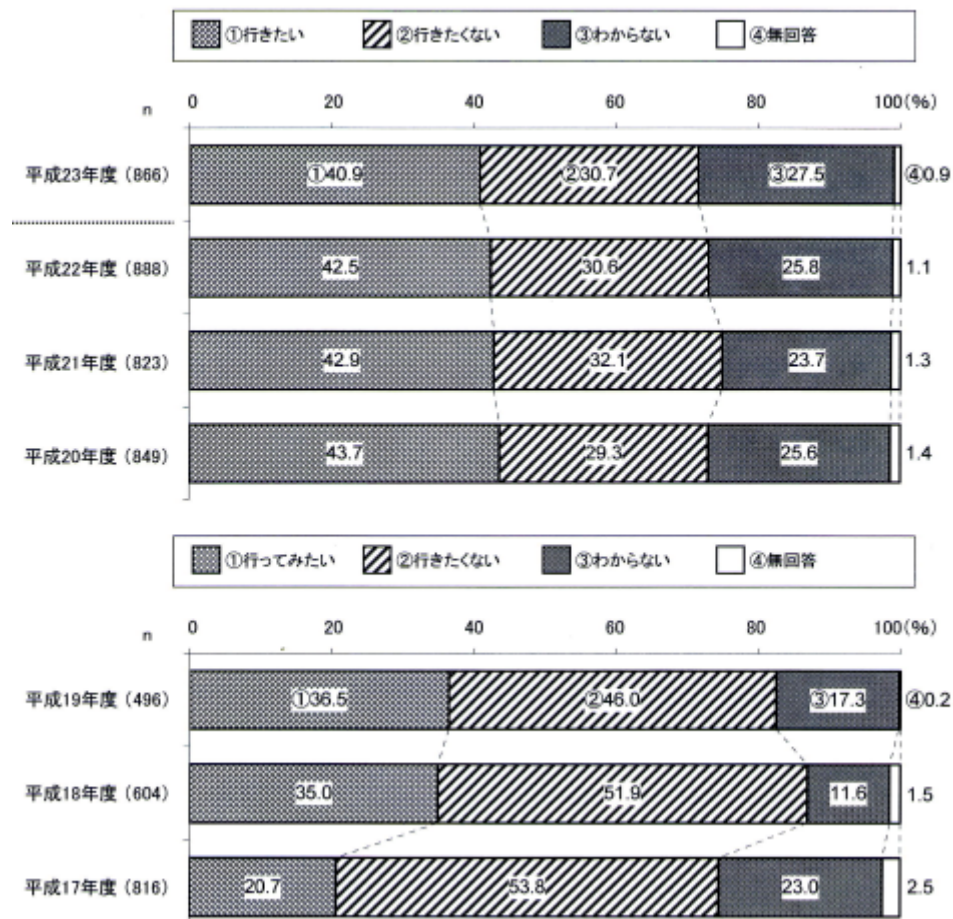


表 5、歌舞伎町へ行きたい理由

【問 5 で、「1 行きたい」に○をした方におたずねします。】	
問 5 - 1 行きたい理由は何ですか。(○は3つまで)	(n=354)
1 安全なまちになったと思うから	17.8%
2 歌舞伎町の変化を見てみたいから	34.2
3 楽しいイベントがあるから	7.1
4 新たな興味を引き出してくれそうだから	13.3
5 日本の代表的な繁華街だから	24.3
6 雑多なまちが好きだから	18.9
7 映画館等、楽しめる施設があるから	37.0
8 おいしい店があるから	29.9
9 賑やかで楽しそうなまちだから	17.2
10 歌舞伎町に思い出があるから	17.5
11 その他	7.3
12 わからない	0.8
無回答	0.6

第5章、割れ窓理論とニューヨークのコミュニティ・ポリシング

歌舞伎町は浄化活動によって大きく変わった。少なくとも、今までの危ないまちという印象は無くなりつつある。本章では歌舞伎町の浄化作戦を見ていく前にまず、前提として浄化運動に対する理論的な面を見ていきたい。そうすることで、歌舞伎町浄化作戦がいかに効率的に行われたかの参考とする。特に歌舞伎町は同じ繁華街として共通点を持つニューヨークのまちづくりを大いに参考にした。浄化活動が本格化する前の1990年代ごろ、ニューヨークでは「割れ窓理論」が犯罪防止策としてとられた。歌舞伎町浄化においても、この割れ窓理論は幅広く取り入れられている。

かつて鈴木喜兵衛が歌舞伎町を作り上げた1940年代、歌舞伎町が目指したのは東京におけるパリであった。新宿コマ劇場を中心に広場を置き、これを囲むように演劇場を配置する形はいかにもヨーロッパ風のもので、歌舞伎町が世界都市パリのような華やかな文化・芸術の発信点になることを目指して作り上げられていた。

しかし、その後歌舞伎町が治安の悪いまちといったイメージを持たれるようになると、このまちが次に参考にしたのはニューヨークであった。

歌舞伎町とニューヨークには、街としての規模は違うが、確かに類似点が多数存在する。多様な人間が往来する街であり、音楽・芸術が盛んで文化の発信地である。政治・経済的にも重要な位置を占めている地区があり。同時に暴力がはびこる街としての側面もある。

この章では歌舞伎町とニューヨーク市のまちづくりの取り組みを比較し、歌舞伎町のまちづくりの重点とニューヨークとの相違を発見していきたい。

アメリカ東海岸に位置するニューヨークは知っての通り世界経済の中心地であり、多くの人間が往来し、多人種が入り乱れた多文化共生の大都市である。かつて、ニューヨークの様々な公共空間には「大なる許容性」が遍在していた。どのような「存在」(階級、職業、人種、ジェンダー)もまた「英語方言」も恥じることなく、平等な地平上で対面し、議論し、あるいは歓談し、あるいは談笑し、親交を深めることが出来るというような「群衆空間 (swarm space)」(高祖 2006 pp.12)であった。以上のことは4章で述べられたく新宿的なもの>の特徴と近似しており、雑多なあらゆるものを飲み込んでいく新宿というまちの許容性がニューヨークにも存在し、そしてそこに集まる人びとが互いに集まり言葉を交わす中で生まれる共同性の交感があったこととよく似ている。そしてここに生きる「民衆」の生活、文化、闘争、都市空間を生産する姿態がニューヨークという都市を紡いでいった。そこにあるのは上演される〈出来事〉としての都市の姿であり、ニューヨークという盛り場のあり方であった。しかし、そのようなニューヨークの都市文化は今や失われつつある。そこには、歌舞伎町が参考にした、ニューヨークという都市に起こった浄化運動によって及ぼされた大きな影響力の影が存在する。ニューヨークはかつてあった盛り場としての魅力を失ってしまったと言われる。巷を統制するためのノートラランス政策が強められ、人びとは周辺部に移住してしまったからだ。ではニューヨークにあった浄化運動とその経緯はどんなものであったのだろうか。

1990年代アメリカには割れ窓理論と呼ばれる犯罪防止法が広まった。この理論で強調されたのが、法務執行期間相互間及びコミュニティとの間におけるパートナーシップの必要性であった。1970年代から80年代にかけて高い犯罪率であったニューヨーク市において1990年以降の暴力犯罪の減少は顕著であり（ケーリング コールズ 2004 序文viii参照）、しばしばこの都市が割れ窓理論をテーマにした議論で語られることが多い。では、具体的に当時ニューヨークではどのような取り組みが行われていたのであろうか。これを考えるには、まず「割れ窓理論」についてもっと知る必要がある。

割れ窓理論では無秩序が犯罪を起こす要因となると述べられている。違法にはならないような軽微な違反行為が行われることで秩序が乱れ、それは地域コミュニティに不安を生じさせる。その不安が、いずれは重大犯罪や都市の衰退を起こす原因となる可能性がある（ケーリング コールズ 2004 pp.26~32 参照）。そのような危険な事件を起こす原因ともなりえる無秩序を抑制するために行われたのが、市民による街頭パトロールであった。市民のこのような活動は、警察の協力のもと「街頭ルール」が定められ、路上生活者の物乞いや、飲酒・薬物などが対象として取り締まられるようになると如実に効果を発揮するようになった。このような活動に市民の多くは好意的な意見を持ち、実際、市民の犯罪に対する不安が大きく解消されていった。それは警察と市民の厚い信任があったからこそ成せたものであった。このような無秩序と犯罪の関係性については様々な議論がなされているが、実際に市民の活動によって犯罪率が大きく減った経緯があった。

上述したような、市民による秩序維持としてコミュニティ・ポリシングという考え方がある。コミュニティ・ポリシングとは文字通り市民の共同体による秩序維持活動のことだ。しかし、それは以上のような簡単な一言では言い表せない。ただ市民団体が近隣をパトロールするだけではコミュニティ・ポリシングとしては成り立たない。コミュニティ・ポリシングとはもっと地域のニーズや伝統や価値観を反映したものであり、警察とコミュニティが密接に関わっているからこそできる秩序維持活動なのだ。『割れ窓理論における犯罪防止』ではコミュニティ・ポリシングの第一には、幅広く警察と市民の信頼関係に重点を置くべきだと述べられている（ケーリング コールズ 2004 pp.80~ 第三章参照）。そして、地域の個別の問題に、生活の質、不安の軽減、などの観点で解決案を探っていくことが重要である。しかし、ニューヨーク市の活動を見てみると必ずしもそうではなかった場合も多い。コミュニティとの連携という形で警察が市民レベルの問題にも介入するようになると、それは警察の活動に主に重点が置かれた友好的でないもののように映ってしまう。いずれは警察が積極的に市民レベルで解決できる無秩序を強引に解決してしまわないかといった問題がでてくる。ある点ではそちらの方が問題解決には早いのかもかもしれないが、それでは市民の不安といったものが的確に取り除かれなことがある。また、それはふとすれば、市民は市民レベルで貢献することが可能である治安維持活動に対しても受動的になりかねない。コミュニティ・ポリシングに求められるものは警察との有効な関係である。それがなければ市民の不安は拭い去ることができない。

このような「割れ窓」理論とコミュニティ・ポリシングの考え方はあらゆる地域にコミュニティに適応するものだ。もちろん、歌舞伎町の浄化作戦もこうした考え方を念頭に組織されている。警察と市民との協力関係は常に友好的でなければならない。もし警察が過剰に関与する形となるのであれば、それは市民の不安になりかねない。例えば、1960年代の新宿ではそこに集まる若者と警察の対立は確かに存在した。このことがマスコミの注目を得て、新宿は危ないまちといった負のイメージを持たれてしまう原因となった。そして1970年代以降、歌舞伎町の中で浄化運動が始まる中で、歌舞伎町に住む住民と警察の連携はそれほど上手くいってなかったのではないだろうか。2000年以降は、歌舞伎町ルネッサンス推進協議会が立ち上げられたことで、歌舞伎町の警察や区と市民、歌舞伎町商店街振興組合の協働関係はより強固なものとなった。それは、実際に歌舞伎町の犯罪率を大幅に下げた。このことで住民や、歌舞伎町に集まる観光客の不安は大きく解消されたはずだ。

そこで、またニューヨーク市のまちづくりに話を戻してみよう。前述のとおり、ニューヨーク市には1990年代ごろまで汚い・危険といった悪いイメージが定着していた。そこで、ニューヨーク市は治安を改善し、安心なまちであることを発信するとともに、観光地としての復興を企てた（ケーリング コールズ 2004 pp.180 参照）。地域・行政・メディアを巻き込んだこの一大事業には1994年に市長に就任したルドルフ・ジュリアーニ氏の貢献が大きい。ジュリアーニ氏は治安の向上、行政改革と経済活性化を公約に掲げ、「割れ窓」理論による軽微な犯罪さえや秩序違反を許さないコミュニティづくりを行った。特にタイムズスクエア BID という地域住民や行政・企業の協働の組織では、路上パトロールや清掃などの他、外灯空間の整備や福祉サービスなど様々な活動を展開するとともに、治安が回復されたタイムズスクエアを中心に再開発を進め、映画・音楽などの娯楽施設を移転することで観光客の集まる地域として成功させた。

「割れ窓」理論が提唱したことの大きなファクターが、犯罪が個人によって起こされるのではなく、場所や状況によって起こされるという考え方だ。その地域の無秩序が犯罪を呼ぶのであれば、その地域に根ざした人間が警察というプロフェッショナルの力を借りながら秩序維持に努める最善なのではないだろうか。このような秩序維持活動を通じて市民の不安を取り除き、より安心できるような場所を作り上げていくことで、回遊性が高く、人を呼び込めるまちづくりが可能となるだろう。

第6章、歌舞伎町浄化運動について

歌舞伎町には多くの人間が集まるがゆえの問題を抱えている。それが時に事件となり、歌舞伎町は世間に悪いイメージを持たれてしまう原因となってしまう。歌舞伎町浄化作戦はそうした、歌舞伎町の犯罪率を下げるとともに、犯罪を予防する取り組みであった。歌舞伎町が人を呼び込む健全なまちとなるためには、このような浄化作戦と安全・安心の確保は必須事項であり、歌舞伎町が必ず取り組まなければならない事業であった。

6-1、歌舞伎町の浄化運動の経緯

- 1975年ごろ 歌舞伎町が青少年への悪影響となるといった指摘がされ始める
- 1980年 新宿駅周辺環境浄化対策会議が設置
- 1982年 風俗営業等取締法施行条例改正
- 1984年 歌舞伎町環境浄化町民総決起大会が開催
- 1994年 歌舞伎町環境浄化パトロールが開始された
- 2003年 「歌舞伎町浄化作戦」が始まる
- 2004年 「歌舞伎町刷新プラン」の発表

まず、ここでは浄化作戦がなぜ行われたかの経緯を見ていきたい。1975年頃から歌舞伎町は青少年への悪影響になるといった懸念がなされるようになった。「若者のメッカ」として新宿が享受された1960年代を越えて、1970年代新宿は多くの再開発を迎えることとなる。そうした時代に新宿の中でも特に多くの先鋭的な、猥雑なものを受け入れていく土壌のあった歌舞伎町において、風俗産業の膨張や暴力事件の発生などは必然的なものであったとも言える。新宿駅西口における放火事件、キャッチバーへの監禁による大学生の死亡事故、学校前で営業していた風俗店の問題などがたびたび起きたことで1980年には新宿駅周辺環境浄化対策会議が設置され、歌舞伎町の治安維持が地域ぐるみで行われるようになった。

1980年代のバブル景気を迎える前には歌舞伎町への人の流れは最盛期と言えるほどに活発となった。東京都庁が新宿へと移転される頃には再開発が行われ、それと同時に土地の売買に暴力団が大きく関与していることが明るみになってきた。1982年には地元・行政・議会が一体となって20万人の署名を集め、風俗営業等取締法施行条例改正が行われた。それに続き1984年に「新風営法」が施行される。これは画期的な法律であると同時に今までの歌舞伎町にあった娯楽文化や飲食店などを本質的に変えてしまうこととなった。規制によって廃業を余儀なくされる店もあった一方で主に性風俗業においては法の網目を切り抜けるビジネスが模索され、皮肉なことにそれは歌舞伎町を性風俗の最先端へと押し上げていくこととなる。こうした歌舞伎町の性産業の肥大化に対して行動をとったのが歌舞伎町振興組合であった。「新風営法」と同年に振興組合は歌舞伎町環境浄化推進町民総決起

大会を開き、歌舞伎町の浄化作戦を表明した。

浄化作戦では主に特別クリーン作戦の実施、町内パトロールなどを警察と協働で行い、これは実際に風俗関連の店舗が減少するなどの効果があった。しかし、それでも既についてしまっていた歌舞伎町の悪いイメージは簡単に払しょくすることはできなかった。そのため、歌舞伎町は浄化作戦と同時に歌舞伎町が健全であることを伝えようとするPRにも力を入れていくようになった。

1994年には外国人による犯罪などの問題に当って、あらためて「歌舞伎町浄化パトロール」がスタートし、新宿コア劇場周辺を巡回して歌舞伎町の環境浄化に努めた。新宿区には「歌舞伎町浄化本部」が設置され、歌舞伎町にはより本格的に浄化のための準備が作られていった。それと同時に、「歌舞伎町安心マップ」の配布、HPの立ち上げなどのPRも並行して行われた。全国各地、あるいは世界各国からやって来る観光客に対して、歌舞伎町の安心安全で楽しいまちであるということをアピールすることを目的としていた。これにより歌舞伎町はマスコミが発信する悪いイメージを払拭するために、自らの手でまちのPRをしていくことでより良いまちづくりを推進することができるようになった。歌舞伎町の浄化と治安維持は歌舞伎町が人を呼び込むためのまちづくりの発展とともに歩み始めたことを実感できたのが、この1990年代であった。

2000年には「ぼったくり防止条例」が施行、歌舞伎町での法外な勧誘が規制され今まで以上に歌舞伎町はより安全なまちとなった。しかし、ここで歌舞伎町の浄化は転機を迎えることとなる。それは翌年の9月に起こった雑居ビル火災事件によるものだった。44人の死者を出したこの事件は放火による火災が原因であった。この事件以後、歌舞伎町における防火管理が徹底されていなかったことや、外国人労働者への周知が足りていなかったなどの問題点が指摘された。新宿では、延べ床面積1万平方メートル未満の建物は新宿区の指導対象建築物となり、1年から3年の間に一度は防火設備等の状況報告が義務づけられている。しかし、その条件に当てはまる建物の約半数の1050件は報告を行っていなかった。また、実際にビルのテナントに入っている店舗と保健所に提出された店舗名が違っている割合がおおよそ3割にもものぼっていたことも分かった。これらは主に歌舞伎町におけるテナントの経営者の頻繁な入れ替わりが原因であると考えられる。歌舞伎町の振興組合に加入し、長く経営をしている店ほど法律は厳守されているのだが、そうでない新規参入の店、外国人経営者にはそのような法律が周知されていなかった。

この雑居ビル火災事件を機に歌舞伎町というまちはより熱心に安全への取り組みをしていくこととなる。また、この事件によってついた歌舞伎町の悪いイメージを払しょくすることが当面の目標ともなった。

2002年には警視庁により街頭防犯カメラが55台設置される。同時期に、振興組合は「新宿歌舞伎町を、楽しく、安全で、安心できるまちにするための宣言」を行い、店舗同士の協力を強めてより安全なまちを作り上げる固い意思表示をした。また、同年には入管法違反の外国人の摘発が行われるなど、ここにきて一気に歌舞伎町は警察と連携し、安心安全

なまちづくりのために本腰を入れるようになった。(歌舞伎町振興組合 2009 pp. 74~101)

以上に見てきたことからわかることはふたつ。歌舞伎町の浄化作戦は、4章で述べた新宿が無差別にあらゆる流れ者を受け入れてきた経緯から顕在化していくことになる犯罪に対しての反動であり、またそれ自体が〈出来事〉として歌舞伎町で上演され、歌舞伎町の魅力として享受されてきたものであった過去の歌舞伎町のあり方とは違う、新たな歌舞伎町のまちづくりのあり方であった。1960年代の新宿が「若者のメッカ」であった時代を引き継ぎながらも、歌舞伎町はより統制された安全なまちとして人を呼び込んでいこうとした。それはある種の人にとっては歌舞伎町を退屈なまちにしてしまうものかもしれない。しかし、多くの歌舞伎町が危ない街であることを理由に避けてきた人たちにとっては、歌舞伎町が再び繁華街として訪れやすいまちとなるために必要とされる過程であった。

浄化作戦という組織だった活動が歌舞伎町の文化にかなりの影響力を持っていたことは容易に想像できる。今までの歌舞伎町の流れ者たちとそれを抑制したい側の力関係は、ここで少し後者の側に傾いてしまったのではないか。歌舞伎町は不寛容なまちになってしまっていないか。そこで、行われたのが歌舞伎町のPRであった。歌舞伎町では浄化作戦が行われるのと並行して歌舞伎町の健全で明るい安全・安心を発信するこの活動も欠かさず行ってきた。元来、歌舞伎町の浄化作戦がマスコミによって発信される歌舞伎町の「危ない町」という悪いイメージを払しょくするためのものであったのだから、それは当然行われるべきことであった。しかし、筆者はそれが単に浄化作戦の一部だけではない、観光的意味もあるのではないだろうかと考えている。確かに今までより安全になった歌舞伎町では、より人が気負いなく集まれるようになった。しかし、そこにはかつてあった歌舞伎町の無秩序な魅力が失われてしまっている。そのため、歌舞伎町はそういった非合法の流れ者のまち、危険なまちというだけではない歌舞伎町の魅力をアピールする必要があるが出てきた。ならば、それはもちろん歌舞伎町の浄化と並行して行われるべき活動のひとつであったことも納得できるだろう。そして、そういった活動はこの後、歌舞伎町の浄化が激化する2004年以降、さらに重要なものとなっていく。

6-2、歌舞伎町ルネッサンス

歌舞伎町の浄化作戦は2003年を境にさらに激化していく。2001年に起こった雑居ビル火災事件を受けて2年を経て、より体系的に様々な歌舞伎町に関わるアクターの協働によって大規模な作戦が可能となったからだ。

2003年、東京都知事・石原慎太郎は暴走族対策で名を上げた警察官僚である広島県警本部長竹花豊を治安担当の副知事に任命した。彼は、緊急治安対策本部の本部長にも収まり、警視庁として、新宿、池袋、渋谷、六本木を重点地区とした不法滞在外国人の摘発を積極的に行うと宣言した。そして、同年10月新宿において、違法風俗を一斉摘発する「歌舞伎

町浄化作戦」をスタートさせる。

新宿区では「新宿区民の安全・安心の推進に関する条例」が2003年に制定され、翌年には新宿区長・中山弘子を中心に歌舞伎町対策推進会議が設置された。

また、住民組織からは同じく2003年に新宿繁華街犯罪組織排除協議会が発足された。これには歌舞伎町だけではない、新宿駅東口、西口、大久保百人町などの各地区の商店街も参加した他、ホストクラブ協会、カラオケ業防犯協会、そして警察までも協力して歌舞伎町のパトロールや暴力団排除公演などが催された。これには、歌舞伎町が「大都市等の繁華街での安全・安心まちづくり」のモデルとして取り上げられたことも背景にあり、模範としての安全を示す場所となったという経緯があった。

歌舞伎町の浄化の取り組みは今まで以上に体系化された警察と地元との連携によって行われた。2004年6月には「歌舞伎町刷新プラン」が発表され、歓楽街における治安対策に加え商店主らによる自主防犯活動を支援する仕組みを整備、人の集まりやすい商業環境を作ることで安全な街の実現を目指すことが掲げられた。

歌舞伎町刷新プランは2本の柱を主軸としている。ひとつが2004年から3年間の集中的な犯罪インフラの除去と環境浄化。そして、もうひとつが健康で魅力あふれるまちづくりだ。

具体的には、犯罪インフラの除去として不法滞在者・違法風俗の摘発、まちづくりとして清掃・外国人窓口の整備・交通環境の整備・アミューズメント施設やカフェの設置などが行われ、それと並行しながら治安維持・清掃の目的で街頭パトロールが区民やボランティア参加で行われた。

特に清掃のために企画された「歌舞伎町クリーン作戦」は振興組合も積極的に関わって行われ、この地道な活動によって歌舞伎町のイメージはより明るいものになっていった。

・歌舞伎町ルネッサンス推進協議会の発足

2005年には、「歌舞伎町刷新プラン」の提案者でもある新宿区長中山弘子を会長に歌舞伎町ルネッサンス推進協議会が発足された。歌舞伎町ルネッサンス推進協議会は警察・消防、区、地元商店街振興組合、町会、民間企業、NPO、ボランティアなどの協働によってのまちづくりに取り組む団体である。今までの危ないまち歌舞伎町のイメージを払拭し、健全な大衆文化・娯楽の企画、制作、発表の場である「エンターテイメントシティ歌舞伎町」の実現に向けて活動を行なうために組織された。目標として3つ基本方針、①安全安心・環境美化、②映像・演劇・映画など新しい文化の創造・発信、③魅力ある街並みへの改善が掲げられ、それを元に「クリーン作戦プロジェクト」「地域活性化プロジェクト」「まちづくりプロジェクト」の3つのプロジェクトが立ち上げられた。

「クリーン作戦プロジェクト」では、地元・関係団体が一体となった安全・安心パトロールや環境美化運動、違法広告、違法風俗や暴力団への徹底した取締と摘発の実施、客引き等の迷惑行為を規制するための条例改正などの活動が行われている。

「地域活性化プロジェクト」では、街の情報発信による街の活性化や、シネシティ広場や区立大久保公園を開放してのイベントの開催などを行なっている。こうしたイベントは歌舞伎町の文化に根ざしたものであり、映画に関するイベントや多文化共生をテーマにしたものなど様々である。

「まちづくりプロジェクト」では、街の景観向上や再開発などインフラの整備を主にしている。

これら3つのプロジェクトの中でも歌舞伎町商店街振興組合が住民団体という立場として主体的に携わることができるのは「地域活性化プロジェクト」であり、逆に住民組織の主導だけでは絶対に対処できないには、「クリーン作戦プロジェクト」であった。この活動には必ず警察による法的な協力が必要となる。この部分については7章でより詳しく述べるが、クリーン作戦のようなプロジェクトはコミュニティと警察の連携関係によってこそ適切な効果が得られるものであった。

歌舞伎町の浄化運動は、歌舞伎町のまちづくりにおいても重要な役割を果たしている。歌舞伎町ルネッサンス推進協議会の取り組みは単なる地元住民を巻き込んだそれぞれの地域活動ではなく、まちづくりとしてより総合的なメッセージ性を持った取り組みであること表明している。そのためには3つのプロジェクトがそれぞれに意味を持ち、関係し、繋がっていないなければならない。

6-3、歌舞伎町ルネッサンスの実態

以上が歌舞伎町ルネッサンスの主な活動であるが、では、これらの活動が歌舞伎町および新宿区民にはどのように受け止められているのだろうか。また、どれほどの効果があったと言えるのだろうか。平成23年度の第二回新宿区政モニターアンケートでは歌舞伎町ルネッサンスの推進について、新宿区民に向けて調査が行われた。結果、歌舞伎町ルネッサンスの活動を「知っている」(12.9%)、「聞いたことはあるが、詳しくは知らない」(37.0%)、「知らない」(50.1%)という統計が出た(2011 新宿区長室広聴担当課 pp.28 参照)。区民の半分は歌舞伎町ルネッサンスの活動の存在を知っている、歌舞伎町ルネッサンスの活動の認知度は比較的高いと言えるだろう。しかし、歌舞伎町の印象の変化という点は両極端に振れた。表6は、歌舞伎町の印象の変化に関して5つの項目で質問したアンケート結果だ。アではイメージが向上したと思う人が31.1%いたが、一方でそうは思わない人の数が38.3%おり、歌舞伎町ルネッサンスの活動の効果を認知している人はしっかりといるものの、そうでない人の割合も高いということがわかる。他の項目に関しても同様の傾向が見られたが、特に、エ、文化の発信が盛んになったと思いますか、オ、賑わいのあるまちになったと思いますかの項目ではそう思うと回答した割合が他の項目よりも低く、賑やかな繁華街としての歌舞伎町の魅力の発信が新宿区民には上手く伝わっていないのではないかと、という可能性が考えられる。確かに、歌舞伎町はバブル時代と比べると華やかさを失

っていつているのかもしれない。しかし、歌舞伎町への来街意向は必ずしも低くはない。歌舞伎町ルネッサンスの活動によって歌舞伎町のイメージは良くなっていると感じている周辺住民は一定数いる。特に、安全になったことやきれいになったと感じてくれている人の割合は高い。今後は、歌舞伎町がいかに魅力的なまちとして人を惹きつけていくか、ということが次の課題になるのではないだろうか。

表 6、歌舞伎町の印象の変化

問7 以前と比べて、歌舞伎町の印象は変わったと思いますか。ア～オ全ての項目について該当する番号に○を付けてください。(○はそれぞれの項目で1つ)				
(n=866)				
	思う	思わない	わからない	無回答
ア イメージは向上しましたか	31.1%	38.3%	29.0%	1.6%
イ 安全になったと思いますか	29.9	31.2	37.0	2.0
ウ きれいになったと思いますか	34.9	34.5	28.8	1.8
エ 文化の発信が盛んになったと思いますか	13.2	37.0	47.6	2.3
オ 賑わいのあるまちになったと思いますか	21.1	30.7	45.6	2.5

第7章、歌舞伎町の地域活性化プロジェクト

歌舞伎町は浄化作戦という秩序維持活動によって安心・安全なまちづくりを行うとともにコミュニティの結束を高めてきた。このような活動はただ単に安全が保たれたとただただだけではなく、その安全性を広く広報するとともに、歌舞伎町の魅力を高め発信していくことを同時に行うことで、より地域として一体的な意義のあるものとなる。歌舞伎町はかつてよりはるかに安全なまちとなった、では、それを認知してもらう取り組みはどのようなものが行われていたのか。歌舞伎町の安全を知ってもらうことと、歌舞伎町に関心を持ってもらうことは引き離して考えられるべきものではない。では、どのように歌舞伎町に関心を持ってもらえるよう取り計らうべきか。それを知るためには歌舞伎町の人を惹きつける魅力と観光資源と呼べるものを探らなければならない。そのために観光まちづくりとしての視点を持って歌舞伎町を見ていきたい。

7-1、観光社会学の視点

観光とは本来日常からの逸脱である。社会学者ジョン・アーリーは観光を白昼夢や空想で非日常的な願望を満たす余暇活動・消費活動であると定義づけている（安村 2011 pp. 9）。これを観光のまなざしといい、このまなざしはポストモダニズム以降、歴史遺産や博物館、テーマパークなどに向けられていた。このような考え方を受け、観光社会学を体系化したのがエリック・コーエンであった。コーエンは、観光客は観光に「真新しさ」と「なじみ深さ」の両極とする連続軸から誘導される「観光客類型」を提示した。

歌舞伎町においては、このまちに集まる人はまさに日常からの逸脱を求めている。4章で述べたように、1960年代「若者のメッカ」と呼ばれていた時期の歌舞伎町にはアジールの特徴を持った盛り場としての機能があった。そこには常に様々なものが入り乱れ、混沌とした魅力があり、当時の歌舞伎町はあらゆるものが新しいものとして感受されるような「真新しさ」を持った観光都市であった。観光まちづくりを行うにあたって、そのまちがどのような観光資源を持っているかが常に重要視されてきたが、歌舞伎町は本来、固有の歴史的建造物や産業などを持ってはいないという背景がある。以前まで盛り場であった浅草が歴史的背景を持っていたことに対して、1960年代のかつての歌舞伎町に盛り場の集客が移った際に歌舞伎町にあったものは決して「なじみ深さ」ではなかった。そこにあったのは混沌から生まれる「真新しさ」だったのだ。

このような「真新しさ」は歌舞伎町を形容するにあたって重要な言葉となる。そして、この「真新しさ」は地域をリードするポイントともなる。

新宿では区内に存在する商店街を主に二種類に分類した。新宿駅周辺の巨大繁華街「新・時代リード型商店街」と生活圏を基盤とした「新・生活拠点型商店街」の二種だ。歌舞伎町はこの前者にあたり巨大百貨店を核に東京を代表する商業圏として発展してきた。こうした都市の観光客にとっての最大の魅力は、都市そのものが、歴史的な遺産や日本的な観光資源と並ぶ重要な観光資源となっている（新宿区民部商工課 2003 pp. 9）という点である。

例えば、特色ある商店街やデパート、専門店、ディスカウントショップなどの密度の高い集積、世界の味を楽しむことができる飲食施設、毎日楽しむことができる演劇や映画、あるいはジャズ、漫才・落語などさまざまな催し、豊富な宿泊施設、さらには高層ビル街の夜景から横丁の路地に至るまで、(中略)大きな魅力となるものが豊富に存在する(新宿区民部商工課 2003 pp.9)。このような都市(特に大都市)の持つ諸要素——ショッピング・飲食・娯楽などの消費の中心、近代建造物、芸術鑑賞、スポーツ観戦などの施設や機能の集積、国際性、祝祭感、伝統と変化の両面性、情報・文化の発信地など——によって都市観光は成り立つ(安村 2011 pp.42)。しかし、それだけでなく都市観光は様々な社会構造から都市というものを見る。新宿・歌舞伎町は多くの再開発を通過して、都市機能を変化させてきた。宿場として人が集まり歓楽街としての性質を強めた戦前。闇市がはびこるようになると非合法的な危ないまちとしてひと目を引いた戦後。1960年代には新宿の映画・演劇文化が花開き、歌舞伎町に多くの人が集まるようになる。そして、1970年代、再開発によって新宿西口がオフィス街として発展するようになると、歌舞伎町を含む東口方面には今まで以上に雑多な人やもの、文化が集まり、それに対して浄化が行われるようになった。浄化は観光まちづくりにおいて重要なファクターだ。若者たちにとって、安心して娯楽を楽しむことができることは観光の最低限の条件であり、そうでなければ敬遠されてしまう原因になりかねない。

観光研究では観光客を「ゲスト」、観光地住民を「ホスト」、観光事業者を「ブローカー」と呼ぶ。ここで重要視したいのが「ホスト」である観光地住民の存在である。このホストが関わっていく部分が、歌舞伎町の観光まちづくりを主に形作っている要素なのではないか。

日本全体で1980年代以降、旧都心のビジネス街や生産・物流基地が機能低下をきたし、従来の建築や建造物が陳腐化、不要化する中で、それらは移転や用途変更を迫られ、商業(小売)、文化、芸術、娯楽ならびに機能転換が進んだ(安村 2011 pp.42)という。今、現状の歌舞伎町も現状もこれと同じような局面に立たされている。観光都市化は都市を消費の場としてしまう危険性もはらんでいる、確かに新宿は伊勢丹や三越などの有名百貨店が建つようになる頃にはすでに商業圏として発展していたし、消費の空間というイメージは間違いではないだろう。消費の空間は、そこに訪れる人びとに向けて様々な消費のための演出がなされている。それは華やかな歌舞伎町のイメージとも相容れるものだ。

しかし、歌舞伎町はそのような消費だけではない、繁華街としての魅力を今求められているのではないだろうかと筆者は考えている。もし、そのような消費のまちとしてだけで歌舞伎町が受け入れられてきたのであれば、歌舞伎町の文化はあらゆる点で「商品化」され、それは地域の相互扶助的な社会関係を切断し、社会関係が次第に断絶していく。マーケティングやアニマルスピリットだけでは、持続的なまちへの集客は望めなくなるだろう。歌舞伎町には「商品化」された市場だけではない魅力が求められてきたし、常にそのよう

な魅力を持ったまちであったと言える。「商品化」は都市とそこに住む人との関係性を薄くしてしまうという。歌舞伎町にも、もちろんそのような地域コミュニティ力の希薄化は見取れる。しかし、歌舞伎町は完全に魅力を失ってはいない。なぜなら、歌舞伎町には単なる消費だけの街として享受されるだけではない、まちの魅力があるからだ。

コーエンは観光社会学の主題として①観光客の動機づけ、役割、社会関係②観光システムや観光制度の構造のダイナミクス、③観光対象やその表象の本質、④ホスト社会へのインパクト、という4つの事項をあげた。それを見て考えるべきことは、なぜ歌舞伎町に人が集まり、それはどのような効果をもっていたかということだ。1960年代、若者が集まる理由はそこが盛り場であったからだ。歌舞伎町に日常からの逸脱があり、何者でも受け入れる許容の広さと、そこから生まれる真新しさと共同性の交感があった。それこそが歌舞伎町らしさであった。常に歌舞伎町に行けば何かが起こるような出来事としての魅力があった。それは、なにかもを歌舞伎町の住民が作り上げ演出したものではない、歌舞伎町に起こる出来事には常によそから来た流れ者が演者として含まれていた。そういった点で、歌舞伎町は単なる観光都市や消費空間ではない独自の場所を形成してきた。

しかし、流れ者やよそ者が集まる文化は次第に、歌舞伎町が危ないまちであるといった負のイメージをもたれる原因となった。マスメディアが発達するなかで、なんでもありの歌舞伎町の悪い部分だけがとりざたされるようになった。そこで行われたのが浄化作戦だ。歌舞伎町を安全なまちとし、広くアピールすることで悪いイメージを払拭しようとした。浄化には警察だけではなく、歌舞伎町の住民が大きく関わった。浄化作戦を経たことで、歌舞伎町に住む人たちは住民としての意識というものが芽生える大きなきっかけとなったはずだ。自ら進んで歌舞伎町を見まわるといことは、自分が地域住民としての自覚を促し、まちづくりの参加に積極的な姿勢になる手助けとなった。しかし、それだけでは観光まちづくりとしては成り立たない。歌舞伎町にあるよそ者文化に歌舞伎町住民は向き合い、それを利用し、住民だけではないまちづくりをすることによって歌舞伎町の魅力を取り戻すことが求められた。歌舞伎町の古き良きやがあるとするれば、それは1960年代の当時にあった世界有数の繁華街としての面白さや活力と、鈴木喜兵衛が提唱した理想としての「道義的繁華街」のどちらの方にもある。そして、今の歌舞伎町が目指すのは安全で・安心でありながらも、様々な人が往来するエンターテインメントシティだ。そのためには、地域住民と観光客を含む外からの人たちの連携が求められるのではないか。

観光客が多ければ多いほど、観光地住民は混雑、騒音、ゴミなどの公害を被ることとなる。歌舞伎町においてそれは無秩序を生み出し、市民の不安を煽る。観光まちづくりは必ずしも経済的な効果だけではない、弊害を持っている。そうならないようにするためには、地域住民や市民が常日頃から市民の不安を取り除く努力をし、綺麗に清掃、統制されたまちづくりを行うことが必要だ。つまり、歌舞伎町がエンターテインメントシティとしての再生をするのなら、まず歌舞伎町のコミュニティとしての結束を改めて強くすることが重

要となってくる。その上で、よそから来る人の協力を得ることができればより良いまちづくりが可能となる。

7-2、歌舞伎町の地域力向上のために

新宿駅周辺は、交通機関が発達しており何もしなくても人が集まりやすい地域である。しかし、だからと言ってまちづくり活動を行わなければ、まちや商店街は魅力を失い、ここに来てくれる人も少なくなっていくだろう。なんとなく繁華街である歌舞伎町に人が集まっているから自分も行こうというような群集心理、これをハーディング現象と呼ぶが、このような心理はかつての歌舞伎町にはあったが、今の歌舞伎町には失われつつある。今の歌舞伎町はこの街に愛着を持ち、継続的に来てくれるような人を作るのが求められており、そのような群集心理に頼るだけでない歌舞伎町住民による「ホスト」としてのまちづくりが重要なポイントとなっている。地域住民のホスピタリティがまちの魅力を作るのだ。

新宿区では、産業振興の課題として小売・飲食・サービスなどのビジターズ産業や商店街の停滞、情報発信力強化をあげている。そこで、立ち上げられた戦略は文化と産業を創造する「場と仕組み」をつくるということだ。産業振興ビジョンとして①想像力を活かした産業の振興を図る、②中小企業の経営基盤を強化し、技術革新や高付加価値を図る、③誰もが訪れたいくなる活気と魅力あふれる商店街をつくる、の三つがあげられた。①では新宿の文化を創造し、交流の場をつくるのが具体的な戦略としてあげる。この文化創造と交流の場として、歌舞伎町の大久保公園やシネシティ広場、歌舞伎町商店街は最適の場だと言えるだろう。ここでは多くのイベントが催され、このまちの文化発信地として価値を高めてきた。こうしたイベントには歌舞伎町商店街が積極的に関わり、地域らしさをアピールするとともに良い機会となる。歌舞伎町に持続的に来てくれるようなファンをつくるきっかけとなった。

歌舞伎町の観光まちづくり活動には、地域コミュニティの協力は不可欠なものだ。

7-3、歌舞伎町のイメージ発信

歌舞伎町ではコミュニティを基盤としながら、そこに様々な人をよそから呼びこむことでまちのブランドイメージを作り上げてきた。新宿は今でも世界一を誇るほど人数の人が往来し、歌舞伎町も日本・アジアを代表する繁華街として繁栄してきた。歌舞伎町は「新たな大衆文化を創造・発信し、新たな賑わいをつくる」ことを目標に、歌舞伎町ルネッサンスとして地域活性化事業を行ってきた。この章では歌舞伎町の地域活性化事業、あるいは観光活動がどのような人びとによって行われ、どのような効果に波及したのかを見て行きたい。まず、地域活性に関わるプロジェクトとして歌舞伎町ルネッサンスの枠組みの中に、「歌舞伎町喜兵衛プロジェクト」が作られたことを見てみる。

・「歌舞伎町喜兵衛プロジェクト」

2006年には歌舞伎町ルネッサンスの3つのプロジェクトを総括するような、まちづくりに関わっていく取り組みとして「歌舞伎町喜兵衛プロジェクト」が始められた。このプロジェクトは歌舞伎町の最初期からのまちづくりに携わり、歌舞伎町を作り上げていった人物、鈴木喜兵衛にちなんで、改めて歌舞伎町というまちを見直し鈴木氏の街づくりの理念に沿うようなまちづくりを行っていかうというプロジェクトであった。このプロジェクトでは地域の文化や産業に根ざした店子を誘致・育成し相互交流を図り、歌舞伎町を常に人で賑わう活気と魅力あふれる街として再生しようというものだ。

まずは、インターネットテレビ「新宿放送局」の開始によって歌舞伎町のまちの魅力を常に発信することからこのプロジェクトは始まった。歌舞伎町の健全性をアピールするとともに、歌舞伎町の文化的な面白さによって人を引きつけていかうとした。次に行われたのが、歌舞伎町に吉本興業東京本部および企画制作関連会社を移転誘致することであった。これらは歌舞伎町を文化発信の場として魅力を伝えていかうという考えがあったからだ。

2007年には「ふらっと新宿」という長野県伊勢市、宮崎県、山形県、群馬県、石川県白山市、岐阜県下呂市などの特産品などを販売する地方物産の委託販売ショップが開かれた。歌舞伎町が交通の結末点として様々な地域と繋がっていること、歌舞伎町の開かれたまちとしての地域力を活かしたイベントがプロジェクトの一環として行われた。

これらの活動は今までの歌舞伎町に根付いてきた文脈に沿った形で行われたものであり、歌舞伎町らしいプロジェクトであったと言えるだろう。

喜兵衛プロジェクトは2008年には歌舞伎町ルッサンスを補足する形で始まった「歌舞伎町タウン・マネージメント」（以下、歌舞伎町TMO）に実質成り替わった。歌舞伎町TMOは歌舞伎町ルネッサンスの3つのプロジェクトに地元商店街振興組合や町会、民間企業、ボランティアなどが参画できるような場として組織された。この組織ではニューヨーク市で行われた凶悪犯罪に対する環境浄化を参考に「歌舞伎町のイメージアップのため、発信力のある活動を着実に展開していくこと」に向け、今まで以上に住民からの提案に注目したまちづくりを行っていくための活動が始められた。今後の歌舞伎町の住民レベルの活動においては、この歌舞伎町TMOが果たす役割は決して小さくない。

7-4、歌舞伎町の演劇・映画史

歌舞伎町文化のひとつとしてしばしばあげられるのが演劇と映画であった。この街には鈴木喜兵衛がヨーロッパ風のまちづくりを目指し「広場を中心として芸能施設を集め、新東京の最健全な家庭センターにする」という熱意を受けて作られた新宿コマ劇場が存在した。コマ劇場は歌舞伎町文化の象徴であり、当時、都内最大級の規模を誇ったこの劇場は有名演歌歌手の公演が行われるなど文化の中心地としてとても注目を集めた。

それと同じく、歌舞伎町には映画の文化も根付いていた。コマ劇場完成と同時期の1956年に新宿東急文化会館、ロードショー劇場ミラノ座が開業されると、歌舞伎町には映画

館が集中して建てられるようになりまたたく間に映画の中心地となった。それとともに近くには映画を待つ間に寄ることのできる喫茶店ででき、歌舞伎町で過ごす若者のスタイルが完成されていった。しかし、このような歌舞伎町らしさは、繁華街として今まで以上に人が集まるようになり、性風俗店などが立ち並ぶようになると、そればかりが取り沙汰されるようになり、影を潜めていった。

このような背景を持っていた歌舞伎町の映画文化であったが、浄化作戦が開始され、より健全なまちとしてのイメージを取り戻すとともに、健全な文化発信を目標として映画をテーマにした様々なイベントが催された。2003年には新宿ミラノ座前でハリウッド俳優キアヌ・リーブスらを招いて映画『マトリックス リボリューションズ』のイベントを開催された。特設ステージには約2000人のファンが詰めかけ、日本での公開開始時刻である午後11時の30秒前からカウントダウンが始まり、興奮は最高潮に達し、紙テープや紙ふぶきが歌舞伎町に舞った。健全な歌舞伎町の創世の趣旨を具現化した瞬間のような光景であった（歌舞伎町振興組合 2009 pp. 94）。翌年には映画『トロイ』の舞台セットの展示がされるなど、こうした映画をテーマにしたイベントは地域の中心に広場を持つ歌舞伎町というまちのコンセプトが良く活かされたものであった。このようなイベントにはかつてあった共同性の交感が近似的に見て取れるようであり、映画という歌舞伎町に根付いたテーマと広場と人が集まることに適した場所があつてこそ生まれるものであった。イベントはノスタルジックなものであると同時に歌舞伎町の新しい文化発信を感じさせるものとなった

文化発信としては2005年には『歌舞伎町るねっさんず』というフリーペーパーを創刊された。これは歌舞伎町の文化面、映画や音楽などのカルチャーを歌舞伎町から発信していくために刊行されたものだ。

歌舞伎町はエンターテインメントシティとなるべく、娯楽の中心として常に映画といったものを打ち出してきた。2007年には「東京国際シネフェスティバル」が新宿ミラノ1を会場として行われた。

しかし、このような歌舞伎町の映画産業は歌舞伎町が生み出したものではなく、ハリウッドや様々な異文化的ものを吸収し、それを歌舞伎町から発信しているという点で他の地域産業とは違った特性があるのではないだろうか。歌舞伎町には固有の観光資源である地場産業や歴史的建造物が存在したわけではない。しかし、歌舞伎町というあらゆるものを受け入れていく風土と、そしてサブカルチャーやエンターテインメント精神が歌舞伎町には根付いていた。歌舞伎町の映画文化の発信はそういった視点で実に歌舞伎町らしい観光まちづくりの一環であった。

歌舞伎町の文化は常に劇場や映画とともにあった。しかし、そのことの象徴であった新宿コマ劇場は建物の老朽化を理由に2008年に閉鎖されてしまった。その後、シネシティ広場周辺の映画館も相次いで閉鎖し、歌舞伎町の集客力は大きく下がっていった。いま、歌舞伎町の大きな転機を迎えている。歌舞伎町の貴重な文化財であった演劇・映画はその発表の場を奪われてしまったのだ。歌舞伎町の文化を発信する力はこれ以降、顕著

に下がっていている。歌舞伎町には今までの演劇・映画に頼るだけでない文化発信が求められた。

7-4、歌舞伎町のよそ者を巻き込んだ取り組み

このような映画・演劇文化の衰退を受けて、歌舞伎町はまた新たな形でこの町のファンを増やそうとしている。それは、例えば「喜兵衛プロジェクト」の農山村ふれあい市場や、学生を中心とした音楽・アートイベントなど、新宿・歌舞伎町外からの人間を積極的に受け入れていくような活動によって支えられている。

2001年に歌舞伎町ではより対外的に開かれた「よくしよう委員会」というものが開かれた。この委員会の特徴は歌舞伎町振興組合に所属する人間でなくても歌舞伎町に関心を持って、愛着を抱いているのであれば、歌舞伎町のまちづくりに関わることができるというもので、年々歌舞伎町から離れていってしまった人びとを呼び戻すとともに、新しいリーダーシップや活力を取り入れようという積極的な取り組みであった。実際、委員会の活動には組合員は3分の1以内という構成で、自発的に集まってきた行政、個人事業主、学生やボランティアなど幅広い分野の人びとが、歌舞伎町の安心安全のために考え活動し、歌舞伎町まつり、ファッションショーなど様々な活動を行ってきた。これこそ、かつて歌舞伎町に存在したよそもの文化を取り戻す活動になりえるものであった。

歌舞伎町には歴史적으로よそ者文化が根付いている。よそから来た人間が歌舞伎町というまちの娯楽や風土を作り上げていった経緯がある。しかし、よそ者は歌舞伎町の治安の悪化の原因ともなった。歌舞伎町にヤクザやフーテンなどが集まるようになると、そこには無秩序が生まれ、それは時に重大犯罪として表出することとなった。それは若者が歌舞伎町を敬遠するには十分な理由となった。歌舞伎町には負のイメージがついてしまったからだ。歌舞伎町浄化作戦はそうした歌舞伎町の負のイメージを払拭する。そして歌舞伎町ルネッサンスの取り組みはそのような今までの浄化作戦にあった負のイメージの払拭だけでなく、新たなバイタリティのある人たちをまちに呼びこむためのまちづくりプロジェクトであった。実際、地元住民や商店街、区役所だけではなく、都や国、文化人や教育機関関係者、学生、障がい者などを巻き込んだ歌舞伎町ルネッサンスの取り組みは、今までにない柔軟な発想をもって地域活性化を行っている。歌舞伎町の新しい文化の創造と交流の場としてこのような多くの人を巻き込んだプロジェクトやイベントはこのまちのまちづくりにおいて大変意義のあるものとなるだろう。

終章

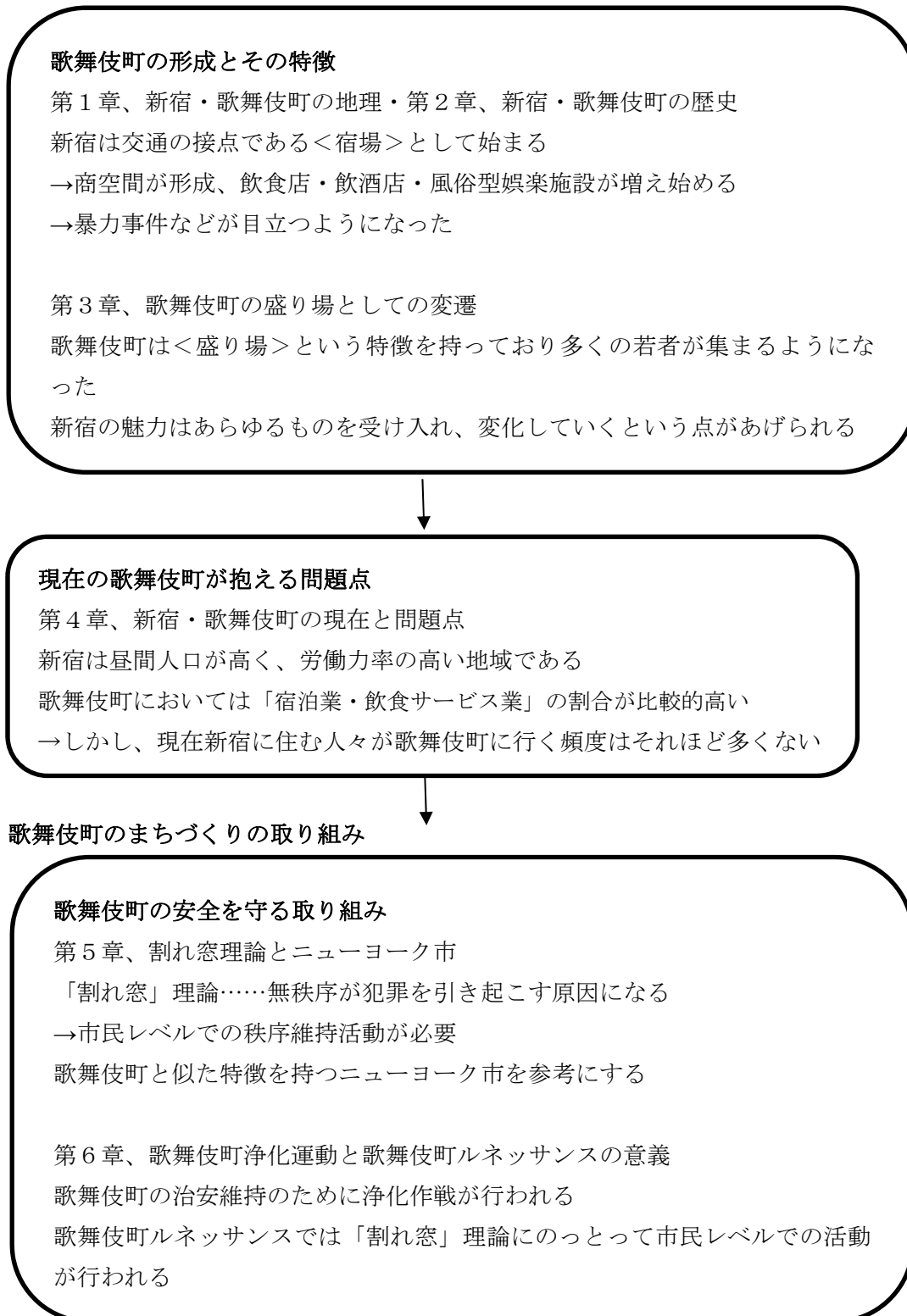
1、論文を振り返り

本論文では、新宿・歌舞伎町をテーマにとまちづくりとコミュニティについての調査を軸に論じてきた。この主題の中では前提として、歌舞伎町が悪いイメージを持たれ、訪れにくいまちとなっていること。そしてその改善のために地域ぐるみで安全を発信し、さらには人を呼び込めるようなまちづくりや文化発信、イベントがなされているという考えがある。実際、統計調査の結果、歌舞伎町を身近に感じることでできる周辺住民や新宿区民にとって歌舞伎町は訪れてみたいまちであっても、訪れやすいまちではないということがわかる。筆者もフィールド調査として何度か歌舞伎町に足を運んだことがあったが、そこで感じたのは娯楽の多さからくる新鮮さや楽しさと、それと同時に猥雑さや汚さと近寄りたさであった。確かに、浄化作戦や歌舞伎町ルネッサンスは一定の効果をあげただろう。しかし、それは簡単に目に見えてわかるものではない。日々の積み重ねによって成し遂げられるものだ。そして、それは地域コミュニティの取り組みと、このまちに訪れ、関連するよそ者との関係によって成り立っている。

今回、歌舞伎町のまちづくりの取り組みを調査するにあたって、実際の地域コミュニティがどのように機能しているのか、どのような目線でこのまちを見ているのかを知るために歌舞伎町商店街振興組合にインタビュー調査を試みようとして幾度かに渡り連絡を行ったが、結実には至らなかった。そのため、本論文は歌舞伎町のまちづくりの内実にはそれほど深く入り込むことができてはいない。しかし、それは逆に歌舞伎町が発信する文化や安全のあり方をよりフラットな目線で外側から見ることができたのではないかと感じている

確かに、歌舞伎町ルネッサンスの名のもとに歌舞伎町の文化発信やイベントが活発に行われている。これらの活動こそが歌舞伎町らしさであると、筆者は感じられた。特にふるさと市場やアート・音楽・映画などのイベントは今まで歌舞伎町に来ることのなかった人を呼び込む良いきっかけとなる。これらの活動は、ただ単に歌舞伎町の魅力を一方的に発信するだけではない、相互のコミュニケーションによって歌舞伎町というまちの活性化につながっていく。文化の創造と発信をかかげる歌舞伎町にとって、文化を育む土壌となるこれらのイベントは、かつて新宿に若者が集まってできた1960年代の盛り場の雰囲気を取り戻すような経験となるだろう。繁華街という特性はより広い視野を持って、多くの人間に働きかけるような歌舞伎町の魅力となったのではないだろうか。歌舞伎町は今、地域コミュニティの強化と同様に、様々な他地域、他分野の人たちとの交流の場を主軸としたまちづくりを行っている

本論文のフロー図





歌舞伎町の人を呼びこむ取り組み

第7章、歌舞伎町の地域活性化プロジェクト

歌舞伎町の安全を保つとともに、安全とともに歌舞伎町の楽しさを発信することが望まれるようになった

歌舞伎町商店街振興組合などによるコミュニティとしての活動と歌舞伎町の特徴であったよそ者の力に注目が集まっている

→歌舞伎町の文化の創造と交流の場づくりによるまちづくりの可能性

2、考察

新宿・歌舞伎町というまちはそこに住む住民たちと治安を守る警察と、そしてそこに訪れるよそ者たちによって成り立ってきた、元来、宿場として発展してきた新宿では、よそ者や流れ者を受け入れていく風土が自然にできていた。しかし、それと同時に宿場としての新宿は売春街としての要素も持ちあわせるようになった。新宿のよそ者文化はいかがわしいものや秩序を悪くさせかねないものと密接に繋がっている。秩序が守られなければ、それはいずれ重大犯罪に繋がりがかねない。特に再開発によって新宿の風俗施設や居酒屋などが新宿東口歌舞伎町近辺に移ると、歌舞伎町地区の治安悪化と犯罪件数の増加はより顕著なものとなる。歌舞伎町は警察と協力し犯罪を撲滅し、歌舞伎町の秩序を守る必要性が出てきた。それは、歌舞伎町住民にとって大切なことであると同時に、歌舞伎町へ訪れる人たちにとっても重要な事であった。かつて新宿が「若者のメッカ」であり、最大の盛り場であった1960年代、歌舞伎町はその何もかもを飲み込む吸収性と、常に新しい発見があるという先鋭性と、その発見を共有することで生まれる共同性の交感によって若者を惹きつけてきた。しかし、若者を惹きつけるものは常に変化していく。いつしか若者は以前のように混沌として猥雑な、危険をはらんだまちである新宿・歌舞伎町を避けるようになった。若者はファッションナブルでスマートな空間を求め、渋谷、原宿、青山などに移っていった。今、浄化が行われ歌舞伎町は今までよりはるかに安全なまちとなった。しかし、一度離れて行ってしまった、若者を呼び戻すことは難しい。歌舞伎町のまちづくりにおいてはよそから遊びにくる人間が常に意識されてきた。この本質は変わらない。しかし、歌舞伎町に人を呼びこむ手法は時代とともに変化している。戦前の風俗街や戦後直後の闇市などは人を呼びこむ手法としてある部分では効果があったが、それは歌舞伎町によってコン

トールすることができない集客活動であった。今の歌舞伎町における観光まちづくりや集客活動は、かつて鈴木喜兵衛が提唱したような「道義的繁華街」の理念にのっとり健全で家族連れでも安心して訪れることができるようなまちづくりに基づくものである。それは官民一体の活動によってのみ実現可能なものだ。歌舞伎町の地域コミュニティは浄化作戦を通じて共通の意識を持って、より強固なものとなったはずだ。さらに、そこに必要となるのは、歌舞伎町にどのような人を呼び込み、そしてどのようなまちにしていきたいかということだ。

歌舞伎町ルネッサンスはかつて近寄りがたかった歌舞伎町をより安全で楽しい娯楽のまちへと変えた。今度はそれを伝え、その楽しさを歌舞伎町に訪れる人たちと共有し、共に育てていくことが重要となるだろう。

参考文献：

『ニューヨーク列伝 闘う世界民衆の都市空間』2006 高祖岩三郎

戸沼幸市、青柳幸人、高橋和雄、松本泰生『新宿学』2013

吉見俊哉『都市のドラマトゥルギー ——東京・盛り場の社会史——』1987

『歌舞伎町の60年 歌舞伎町商店街振興組合の歩み』歌舞伎町振興組合 2009

『新宿・街づくり物語—誕生から新都心まで300年—』河村 茂 1999年

歌舞伎町ルネッサンスの推進-安全な歌舞伎町を築き、誰もが安心して楽しめるまちへと再生するために-

http://www.kabukicho.or.jp/webdata/more/clean_day/renaissance/renaissance.files/frame.htm

区政情報—歌舞伎町タウン・マネージメント

http://www.city.shinjuku.lg.jp/kusei/file13_00011.html

歌舞伎町ルネッサンス推進協議会 HP

http://www.kabukicho.or.jp/webdata/more/clean_day/20041229.htm

『歌舞伎町・ヤバさの真相』溝口 敦著 2009年 文芸春秋

『歌舞伎町略年史』歌舞伎町商店街振興組合

新宿というトポスに関する研究

http://repo.lib.hosei.ac.jp/bitstream/10114/3025/3/ijt_08_06_terui.pdf

歌舞伎町刷新プラン—日本一安全で安心な賑わいのある街を目指して（自民党政務調査会作成資料）

http://www5.cao.go.jp/keizai-shimon/special/vision/life/04/item1_6.pdf

歌舞伎町ルネッサンスの推進-安全な歌舞伎町を築き、誰もが安心して楽しめるまちへと再生するために-

http://www.kabukicho.or.jp/webdata/more/clean_day/renaissance/renaissance.files/frame.htm

『外国人居住と変貌する街 まちづくりの新たな課題』学芸出版社 まち居住研究会 1994年

『割れ窓理論における犯罪防止—コミュニティの安全をどう確保するか—』2004 G.L.ケーリング C.M.コールズ

『よくわかる観光社会学』2011 安村克己 堀野正人 遠藤英樹 寺岡伸悟

ニューヨーク・タイムズスクエアの浄化・再生、ジュリアーニ市政に学ぶ歌舞伎町の再生へのヒント [まちづくり]

<http://kabuki-cho.blog.so-net.ne.jp/2005-09-20>

東京都の区市別刑法犯発生

<http://www.keishicho.metro.tokyo.jp/toukei/keiho/keiho.htm>

「平成 23 年度の第二回新宿区政モニターアンケート」2011 新宿区長室広聴担当課

「研究所レポート 2012 No.1 国勢調査データからみる新宿区の特徴」2013 新宿区新宿自治創造研究所

「新宿商店街振興プラン キラメキ個性ある商店街づくりを目指した」2003 新宿区民部商工課

「新宿区産業振興プラン」2008 新宿区地域文化部産業振興課